

2019



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019 年
1 月号
No. 667

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





二〇一九年
己亥（つちのとい）

干支は全部で60種類あり、それぞれに意味がある。

「己」は10ある内の6番目にあたり、精力が横溢する時期を意味する。「亥」は十二支の最後にあたり、生命が収蔵された核を意味し、新たな始まりの準備時期をさす。

そして「己」と「亥」には「土剋水」という一方が一方を凌駕する関係にある。つまりステップアップの大事な時期にあふれる精力が邪魔をする、調子に乗ると落とし穴にはまるといったことだ。

また干支には「納音（なっちゃん）」という別の意味も割り当てられていて、「己亥」は「平地木」、つまり平地に立つ孤高の木という意味がある。

以上をまとめると、二〇一九年は盛んなエネルギーが飛躍のための準備を邪魔するが孤高の継続力で乗りきる、そんな年ということになる。

どんな飛躍をしようか。そのためにどんな準備が必要か。年頭にあって考えてみてはどうだろう。いい考えが見つかればあせらずに、でもとことんしつこく諦めず、そしてできるだけ丁寧に進めて行くことが肝心だ。

しつこく諦めず丁寧に、いい仕事をしよう。



クチナシの実

△2頁の花▽ 櫻子

花材 梔くわだしの実 (茜科)

山茶花 (椿科)

花器 漆塗麦酒うるしぬりびい 盃

干支伏見人形「亥」

食品の色づけに使われるクチナシの実が血流を良くする薬にもなる。今年の干支の猪と飾ると形が似て面白い。健康な一年を願って。



横から見た奥行き

南天・水仙・寒菊

△3頁の花▽ 仙溪

花材 南天 (目木科)

水仙 (彼岸花科)

寒菊 (菊科)

花器 青瓷壺 (清水卯一作)

常緑で赤い実が美しいナンテンは冬のいけばなに特別感を与えてくれる。辛い時も、難を転じて福となす。



横から見た奥行き



ダイダイ

△表紙の花▽ 櫻子

花材 若松(松科)

橙(蜜柑科)

菊(菊科)

花器 角形陶花瓶

ダイダイの実は冬に色付き春に緑色にもじる。2〜3年は枝に残るので「代々」から名付けられたそう。親戚から枝付きで頂いたので松と深紅の菊を合わせた。漲る力を感じる器にいけると、花から元気を貰える。



横から見た奥行き

赤芽柳・水仙

△4頁の花▽ 仙溪

花材 赤芽柳(柳科)

水仙(彼岸花科)

花器 四彩塗面取高坏(河井透作)

昨年は華老の鈴木秀映先生、竹中慶敏先生、そして河野慶雅先生、坪井二葉先生、清水慶富先生、成瀬慶重先生、仙石慶綾先生、中村慶美先生が他界された。花道へのご尽力に感謝し、謹んでご冥福を祈ります。先生方から受け継いだ技と心を流派の皆様と共に大切に次へ伝えます。

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ⑤③

立花秘傳抄 三

草之部 (つつき)

蓮れん
はすのはな

非祝言。一色の外用いず。

花を芙蓉ふようという。葉を荷葉かようと云い、茎くきを茄かと云い、その本を密みつと云い、未だ開かざるを菡萏かんたんと云い、その実を蓮てん・と云い、・中てんを蓮れん肉にくと云い、実ぬけたる跡を蓮房れんぼうと云い、花の中なかにのしべを蓮蕊れんすいという。根を藕ぐと云う。

本草綱目に云う、花葉常に偶生ぐふしょうす、偶ならざれば生ぜず、故に藕ぐという。

異名、芬陀利花ふんだりけ。風露良ふうろうりょう。

和名、露堪草つゆたぐさ。池見草。つまなし草。

古歌

影うつす花やくもらん池見草波にかかり
て青葉そひつつ

なひきつつ花や咲らん露堪草折ぬ枝にも
風のたまれは

・草冠に的

蓮花は水中出生の物なれば草木に立てまぜ
ては池中の景気瓶上にうつらざるゆえ、一色いっしき
物ならでは立てる事なし。然れども蓮花一色
にて立てるを真の一色といい、水草を立てま
じゆるを草の一色と云う。

荷葉一色



桑原次郎兵衛

第百図

立花 荷葉一色

蓮 荷葉一色真 桑原次郎兵衛

蓮に立てまげて苦しからぬ物、芦、蒲、つくも、杜若、河骨、一切水草のたぐいこれを用いる。又古来菊を前置に用いる。水に縁あるゆえか、このほか陸物を立てまげる流儀もあるといえど、花道の正理にあらず、景気もあしければ当流に用いず。

蓮花は浄土の莊嚴仏心の譬喩たり。しかれば立花にも三世不可得の理をそなえて秘伝とす。蓮花のみにかぎらず、もろもろの花三世の理あらずという事なし。蓮花に限りてその名あること。立て様秘伝なり。



しもく葉の事、うき葉の事、花つかいの事、

葉遣いの事、蓮肉つかいの事、伝受あまた有り。

蓮の一色は開き葉多く、巻き葉すくなく立てること、池中の景気なりといえど、開きたる葉はしおれやすくして賞翫薄し。古来より



第百一図

立花 荷葉一色
荷葉一色行 富春軒
芦 蓮 小菊

卷葉半ひらきを以て一色を成就する物なり。
ある師曰く、半日の客には立つべし。終日には遠慮すべしとぞ。

蓮の一色立てんとおもわば、自ら池辺へいきて開葉、中ひらき、卷葉、やれ葉、こげは、蓮肉、花は赤白、或いは茎風流なるを見立て切るべし。しからずば立花に心得ある人を遣わすべし。花屋といえど巧者なくては切るべからず。

蓮を立てるには先ず込みの真ん中に細き竹を一本つよく立て置き、初め四五本は竹へ結び付け後は竹針を以て茎より茎へとじ付けて立つべし。すぐなるは竹を通し、横へさすは針金を入れて自由に遣う。込みへ茎を指すことなく、こみきわより立て、竹はりがねの余りたる所を二寸ほどにして指し込むなり。

7つの一色の内、杜若、菊、水仙、松は一色以外にも多く使われているが、蓮、紅葉、桜の3つは他の絵図には見られない。紅葉と桜は特別な存在なので。蓮は水中で生育するという出生を重んじて。ただし芦や蒲、つくも、河骨など同じ水草の類は立て混ぜても良いとしている。また古来より菊だけは前置に使うことがあるとして、実際に絵図にも使われている。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』
『花道古書集成 第一期第二巻』

第百二図

二株砂物 荷葉一色
荷葉一色砂の物 寸松軒（初版は富春軒）
蒲 蓮



しからずば＝そうでなければ



間にいるのが好きなレモンちゃん。

いけ花三人とゆかいな仲間
たち展

会期 12月8日(土)～9日(日)

会場 ギャラリー・テイク・ツイ
出品

仙齋との約束

昨年12月に妹のはな、中西さん、奥井さんの三人展があった。健一郎、順之助、琳ちゃん、杉浦さん、赤木さんも加わり、とても楽しい雰囲気の花会であった。

「人生の節目でいけばな展をします」と、父・仙齋と生前に約束していたそうだ。「おう、綺麗な会になったやない」と笑顔で話す父の声が聞こえる気がする。母・ホッホちゃんの満面の笑顔も目に浮かぶ。父と母が持いた種は、皆の中でしっかりと生長している。

以前に紹介した藁駝^{たぐだ}さんの言葉を思い出す。「私は木の育つ力を損なわないようにしてるだけ」。自由に真剣に自分の世界を表現してくれた妹たちの花会を見て、種を蒔くことの大切さと、伸び伸びと育つ環境をつくることの大切さを思った。



いけ花
三人とゆかいな仲間たち展



エゾマツの立花

〈10頁の花〉 仙溪

京都新聞11月9日(金)夕刊

『明治』を彩るいけばなより写真転載

(撮影・水沢圭介)

背景 旧三井家下鴨別邸

主屋1階座敷床の間

花型 立花

花材 蝦夷松

梅

梅擬2種

水仙

貝塚伊吹

満天星

椿

木瓜

花器 銅立花瓶

京都新聞の紙面で、明治時代の面影を残す建物に花をいけて紹介する連載が始まっている。花が飾られた場には植物の伊吹が満ちて命が宿り、その場で暮らしてこられた人物にも自然に想いが膨らんでゆく。

この床の間の掛け軸に描かれているのは江戸時代前期の商人、三井中興の祖といわれる三井高利夫妻の像で、のちに三井財閥となる前の基礎をつくった人物だ。

写真には写っていないが床柱にはピンロウジュ(檳榔樹)が使われている。南国の椰子の仲間、床柱に使われるのは珍しい。

部屋の格に合わせて、エゾマツと紅白のウメモドキで立花を立てた。



ツガの立花

△11頁の花▽

京都女流京華会いけばな展

朝倉慶佐先生出品作

花型 立花

花材 梅

梅擬

水仙

貝塚伊吹

椿

紫蘭

花器 銅立花瓶

ツガはマツ科ツガ属の常緑樹。線状で扁平な葉の先がやくぼむ。イチイに似るがイチイの葉先は尖るので見分けがつく。太い幹は砂物むきだが、うまくバランスがとれている。

横から見た奥行き





ヤドリギ

仙溪

花材 宿り木（ビャクダン科）

バンダ（蘭科）

菊「アナスタシア」（菊科）

花器 陶花器（竹内眞三郎作）

冬になると葉を落とした高木に丸い繁みが絡みついていることがある。この不思議な景色の正体はヤドリギで、鳥がこの実を食べ、糞を木にこすりつたところに根を生やして寄生する。冬にも枯れない生命力から西洋では神聖視されて、ヤドリギのついた木には神が宿ると考えられた。悪いものから子供を守る魔除けにもなる。

恋人同士がヤドリギの寄生した木の下でキスすると神の祝福を受けられるとも、敵同士が出会った争いをやめるとも言われている。

新しい年の始まりに、良い年となることを願って、ブナの木についた大きなヤドリギを洋菊と蘭をとり合わせていけた。

横から見た奥行き



いけばな

桑原専慶流

テキスト

2019 年

2 月号

No. 668

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



晩白柚^{ばんぺいゆう}

△2頁の花▽ 櫻子

花材 チューリップ（百合科）

スイートピー（豆科）

菜の花^{あぶらな}（油菜科）

晩白柚^{あぶらな}（蜜柑科）

花器 紺彩陶水盤（重松康夫作）

久しぶりにテキストでパンペイユウを花といけてみた。暮れにいつも熊本の知人から戴く晩白柚を新年の座敷に飾らせていただくのを楽しみにしている。今年も南天と菊の投入れ、干支とパンペイユウを置いて良い香りを楽しんだ。

1月末にはチューリップや菜の花、スイートピーが長くてしっかりといたので、相手を変えて再び後ろに置いてみる。早春の淡黄色が萌え出つるようで貴重な春が訪れた。災害を乗り越えて作られた尊い果物。

横から見た奥行き





白梅の盛花

△2頁の花▽

仙溪

花材 白梅（薔薇科）

アイリス（菖蒲科）

小菊（菊科）

花器 四彩塗方面取高坏（河井透作）

今月号には4作に白梅を使っている。この頁の盛花と10頁の立花は稽古用の比較的若い枝で、4頁の大作投入と11頁の生花は苔のついた花展用の古木だ。4つの梅のいけばなを見比べると、生花の梅が一番梅らしさが感じられる気がする。梅らしさのポイントは大い幹と細い枝の対比にあるようだ。

この白梅の盛花にも、太い梅の苔木を低く重ねて出していけば、さらに風情のある景色になっただろう。その木本来の「らしさ」はどのようにするかは表現できるかを考えること。今回の4つの梅のいけばなから改めて気付かされた。



横から見た奥行き

ブルーチューリップの花器に

△表紙の花▽ 櫻子

花材 小手毬（薔薇科）

エビデンドラム（蘭科）

ランタンキュラス（金鳳花科）

花器 トルコ製陶花器

早春に咲く花をチューリップ柄の花器にいけた。温かな光とぬくもりをいち早く感じて花を咲かせるランタンキュラス。花びらの枚数が百枚以上はあると思うが、ゆつくりと大きな花を開いて最後まで散ることなく、萼に支えられて咲いてくれる。

コデマリも今年は豊かに花付きも良く力強い。1本からの枝分かれも多くてそのままの形をいける事が出来た。

エビデンドラムも小さな花の集まりで丸くまとまる花だ。同じかたちの花を取り合わせるのはとてもいけにくいのだが、こんな花器と花との組み合わせも今ならでは。



横から見た奥行き



枝物 4 種

「ジャパンスピリッツ in 京都」

仙溪

花材 松（松科）

白梅（薔薇科）

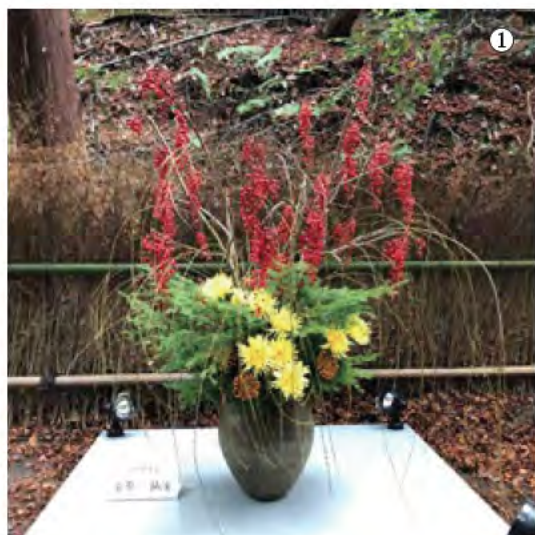
南天（目木科）

椿・紅白（椿科）

花器 焼締陶花器（竹内眞三郎作）

場所 京都駅ビルグランビア前

この花器は板状にした土を丸めて細い筒を作り、それを並べてつないだもので作ってあるのでとても重い。大地のような、巨木のような、そんな印象の器だ。敢えて草花を使わずに枝物 4 種でまとめたが、大きな枝を器が軽々と受け止めてくれた。



嵐山花灯路 桑原仙溪 飯桐 枝垂柳 洋菊 2種 椿

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

河骨

非祝言。水ぎわ。

異名、水鏡草。金蓮子きんれんし

はりがねを入れて遣いてよし。葉しおれやすき物なればつはの葉をかり用いる。惣じて水草水ぎわに遣うに口伝有り。

蓮花、河骨、水あおいなどは池にて切る時糸にて茎をつよく結び置いて、その下より切るときは久しくしおれざるなり。

紫苑しおん

非祝言。花は上、葉は下、広葉の類さし合いなり。

之於爾しおに。

異名 返魂草へんこんそう

和名 おにのしこくさ ひとしくさ

花を正心に用いる時は下にならず葉を遣うべし。花ばかりは遣わぬなり。葉ばかり遣う時は胴より上へは用いず。出生直なるゆえ、副、請に用いず。葉を遣う時は大小をとりまじえて、陰陽を遣いわけてよし。葉使い柏の意気と同前なり。

萱草かんぞう

祝言、心にも用いる。上中。

時珍曰く、萱本かん媛に作る、媛は忘なり。さるによつて和名にもわすれ草と云う。

一名宜男きなん。懷妊婦人その花を佩おびれば則ち男を生ずと云う。

忘憂草。人の憂いを忘れんと欲するにこれを服す故に之を名付く。

ある書にこの花を祝言にあらずと云えり。忘るという名をいむか。この花名の由来をしらざる故なり。療愁草としてその徳ある草なれ

河骨は杜若一色の下段に使われている。それらの絵図を見ると、まさに沼や池の景色が目につく。河骨の花の黄色が、杜若の紫色と白色によく映っている。



第九十八図

立花 杜若一色

杜若一色(の行) 桑原次郎兵衛

杜若 河骨 著我 ※(一)内は初版

ば目出度きものなり。

萱草宵より立て置く花ならば、明日開くべき花を指すべし。ひらきたるはしほみ、つぼみは開くことはやきものなり。必ず下に葉をあしらうべし。

萱草を真にした立花図には萱草の葉と共に紫苑の葉が効果的に使われている。手彩色のされた図を見ると、萱草の黄色に桔梗の紫色、嫩葉の赤色が効いている。

第十八図

立花 萱草除真

除心の内行の花形 中流枝立 寺田清左衛門

萱草 苔 松 桔梗 檜木 小菊 紫苑

著我 嫩葉



第九十九図

二株砂物 杜若二色

杜若一色の砂の物 西村松庵

杜若 河骨 著我

【前号の訂正】

5頁・・・その実を蓮 と云い、中を・・・
6頁・・・巻き葉少なくなつてること池中の・・・



①ポパム純子さんと。②カフェでのレッスン。③右から2人目がクララ。④公園清掃奉仕をして切った枝とガーベラの生花。

イギリスで学んだ事

桑原素溪(健一郎)

「ジェントリー、ジェントリー(優しく、優しく)」満面の笑みで私の真似をしてくれているのがクララだ。

クララは賢いが人に見せびらかすなんてことは一切せずに、戯けてみせる。誰にでも好かれるタイプだ。ガーベラだって食べる(実際には食べていない)。彼女は唯一、私が滞在中の教室に全て来てくれた。彼女はずっと、ジェントリーと言っている。私の言おうとしている事が伝わったみたいだ。

生け花という概念のないイギリスでお花を教えることになった私は生け花の説明からしなくてはいけない。格式高いという偏見がないので、気軽に生け花に参加してくれる。英語を上手に使いこなせない私は、すべての教室で生徒さんたちに対して、2つのことだけを教えることに専念した。

まず1つ目が「空間の美」である。古来中国絵画で始まったとされる空間における絵画での「気」の表現は西洋絵画には見られなかったものだ。何もないところには何も描けないが、確かにそこに感じる何かは存在している。その何かは「気」であり、それが「空間の美」である。空間に対する認識の違いは、花文化にも現れている。フラワーアレンジメントはお祝い事に使わ

れることが多く、綺麗な花を多く使い360度どこから見ても綺麗なように花で空間を埋め尽くす特徴がある。一方、日本の生け花は床の間に飾ることを前提としており、正面から見て綺麗なものが評価される。そして花と花、枝と枝の空間に美を感じる心が生け花を生け花たらしめている。日本人や中国人だけが感じるであろう空間の感覚を伝えることは難しいと考えていたが、お弟子さんの中には「何だか分からないうけど、この花と花の空間がとても好きだわ。ここは直さないでね。」という方もいたので、花と花の絶妙な空間に特別な感覚を少しは感じ取ってもらえる事ができたと思っている。

そして2つ目が一番大切な、「お花に優しくすること」これは私が一番伝えなかったことだ。お花をぞんざいに扱ったり、踏んでもなんとも思わない人たちが時々いる。忙しい日々の中で自分のことで手がいっぱいなのだろう。私はこの原因が植物と人間の「死」の違いにあると考えている。人間や動物の死は個体的で明確なのにに対し、植物の場合は根っこが死んでいなければ他の部分が枯れても死にはならない。植物はどこまでが個体なのか分からないので、「死」そのものが曖昧になってしまうのではないだろうか。私はわざわざ切り花のお花を生けている以上はその命に感謝し、慈しむことを彼らに伝えたかった。

デモンストレーションをするとみんな



なが次々にお花を生け始める。およそ生け花が似つかわしくないであろう彼らが、一本一本の花を水切りし、葉の一枚一枚を丁寧に撫でていく光景は感慨深かった。一人だけ3回すべての教室に参加してくれたクララは、最終日になるとガーベラを食べてしまいたくなるほど花と仲良くなり、とびつきの笑顔で笑っている。

最後にはありますが、教室英語が慣れない私の言葉に必死に耳を傾けながら理解しようとしてくれた皆様、本当にありがとうございました。イギリスに行く2週間前にいきなり連絡をとったのにも関わらず、5週間もの生け花合宿の機会を設けてくださった純子さんには感謝しきれません。長い間お世話になりました。また京都で会えるのを心から楽しみにしています。

ティムさんの庭で

△9頁の花▽ 素溪

花材 薄の穂すすき（稲科）

百合すいせき（百合科）

西洋接骨木にわとこすけいぼく（忍冬科）

花器 陶扁壺ひょうろ（ティム作）

マンチェスターの陶芸家ティムさん宅を訪問し、庭の草木に百合を加えてティムさんの作った花器にいた。竹のような黒い葉の枝はセイヨウニワトコ（エルダー）で黒い実が生る。魔除けの力があり、映画ハリイポッターでは最強の魔法の杖になっている。



竹真の立花

仙溪

花材 金明竹（稲科）

白梅（薔薇科）

松（松科）

五葉松（松科）

黄水仙（彼岸花科）

椿（椿科）

小菊（菊科）

花器 銅立花瓶

年末に稽古で立てた立花で、写真
は2週間目。そして一ヶ月を経た今
も水仙と小菊をかけて玄関に飾って
いるが、白梅が美しく咲き、キンメ
イチクの葉もまだ生き生きしてい
る。なんとまあ、である。暖房の無
い日本家屋の玄関の間では、冬の間
花がよくもつが、それにしてもキン
メイチクの水揚げの良さには驚かさ
れる。

横から見た奥行き





被災地の焼き物

仙溪

花材 白梅（薔薇科）

椿（椿科）

花器 陶花瓶（金野光賀作）

この花入れは広島県尾道市の陶芸作家によるもので、昨秋京都高島屋での京都新聞チャリティーで入札して手に入れた。作者の金野さん（77）は昨年7月の西日本豪雨の時、裏山からの土石流に約2500点の作品と登り窯も流されてしまった。その時奇跡的に無事に残ったのがこの花入れである。

金野さんはその後、難を逃れた自宅のガス窯で作品を作られているそうだが、再び登り窯で焼き物をつくらうという強い意思を持たれている。いい作品を作り続けるという創作意欲が金野さんを支えている。そんな金野さんの奇跡の花入れに、心を込めて花を生けた。

横から見た奥行き





山菜萼の生花

仙溪

花型 草型 副流し
花材 山菜萼（水木科）
花器 五角陶水盤

これは昨年1月の稽古でいけた生花の約一ヶ月後の写真だ。いけた時は蕾だったサンシュユの花が満開に咲いている。サンシュユの黄色い花は部屋の中でもよく目立ち、そこだけ春の温かな日差しがあたっているようだ。

サンシュユの太枝を使いながら伸びやかに横へ枝を出すには竹筒では軽すぎてアンバランスになってしまう。重みのある水盤を選び、大きめの剣山でいけて、最後に小石で剣山を隠した。

レモン日より

今年5月で7才になる。人間の44才くらいだそう。40にして惑わず」をすでに越しているのだね。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019 年
3 月号
No. 669

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





ヒヤシンス

△2頁の花▽ 桜子

花材 猫柳（柳科）

ヒヤシンス（百合科・雉隠科）
きじかくし

青麦（稲科）

花器 ブルーガラス鉢

2月の料理教室の食卓にはヒヤシンスだけを金属で作られた銀色の筒型花器に飾った。立春前のもとても寒い日が続く頃、冷たい大地から春が溢れるように。花色は赤ピンク、白クリーム、オレンジ、黄色、青、薄紫、濃紫と豊富で、どの色を選ぼうかと迷ったくらいだ。

もうずいぶん前から切花のヒヤシンスはミックスの多色で花屋さんで売られるようになった。安くはないがひとつの茎に沢山の花を咲かせてくれて、香りもつとりするくらい素晴らしく、葉も沢山ついていて素敵な花だと思う。丈が短いので折れ曲がらないように竹串を通してけると日もちもしてくれた。野生は青紫色。ブルーの花器と敷物が似合う。

横から見た奥行き



△表紙の花の解説は9頁▽



母のスカーフ

△ 3 頁の花 ∇ 櫻子

花材 アイリス（菖蒲科）

チューリップ（百合科）

宿根スイートピー（豆科）

花器 コスタボダ・ガラス器

母はシヨールやスカーフが好きで
沢山持っていた。好きなものに出会
うと迷わず一瞬にして自分のものに
するの、もひとつの才能？と思う事
もあった。ゆっくり買い物する時間
もなかったからかもしれない。ひと
つひとつが思い出のあるものばかり
なので、綺麗にして花の敷物にも使
っていいこうと思う。

ヒヤシンスの敷物はブルーのパ
シミナ。チューリップとアイリス
には昔のシャネルのスカーフ。違
う使い方をすると新鮮に見える。父
が愛用したジャケットの端切れでも
妹が敷物を作ってくれた。裏には
MADE IN GREAT BRITAINと書かれ
てあって驚いてる。

横から見た奥行き





紅柘植（紅黄楊）

△ 4 頁の花 △ 仙溪

花材 雪柳（薔薇科）

紅柘植（柘植科）

喇叭水仙（彼岸花科）

花器 溜塗木鉢

三重県鳥羽市菅島^{すがしま}の南斜面に群生するベニツゲは、冬に紅葉する珍しい品種で市の天然記念物となっている。艶やかな厚みのある丸い葉が密生するツゲは、「立花時勢粧」でも「立花第一の景物」とされ、伊勢浅間に紅葉するツゲがありこれを女つげと云う、と書かれている。

紅葉といっても黄土色から赤茶色の地味な色なので、ユキヤナギの明るい白とラッパスイセンの黄色をとり合わせて春を感じる盛花にした。

横から見た奥行き



葵^{あおい}

祝言、心にも用いる。中迄下る。

側金盞花^{そくきんさんか}。蜀葵^{からあおい}。

和名、かたみ草。

古歌

我思ひうつりて花の咲ならばかたみ草と
は何をいはまし

葵の心は赤白をまじえ、正心ともに三本或
いは五本立つべし。出生直にして働きなきも
のなれば、請、控枝、流枝にて花形風流に取
り組むべし。

葵の花は下より早く開きて、上ほど次第に
つぼみにつづきて見事ならず。正心に用いる
時は中ひらきの花のあたりより茎をきり、そ
の切り目見える時は、うつむきたる花を竹は
りをもってあおのかせ、切り目みえざるよう
に、花の精よろしく指すべきなり。横へ遣う
べからず。



寺田八郎兵衛

第六十八図

立花 芦除真

寺田八郎兵衛

芦 葵 松 柘植

小菊 杜若 百合 檜 鳶尾

擬宝珠 要 小羊齒

桔梗 ききょう

祝言、心にならず。

上中下。

異名、利女。房図。

古歌

木の葉をもうらにうたはや一重草葉もう
すやうの露はおけとも

この花里に作りたるは、花しげく茎ふとく、
野にはえたるは花すくなく茎ほそく立花によ
ろし。白、むらさき、八重、一重、それぞれ
に縁おもしろく、直なるは立てに遣い、たお
やかなるは横につかうに、針金をそえてたむ
る。急にたむれば早くしおれるなり。

女郎花 おみなえし

祝言、正心にも用いる。

上より遣いさげて前置の上まで下る。花茎
の上に咲いて高くはえる物は、短く指すべか
らず。ほかこれになぞらえて知るべし。

和名、女倍之。 おみなえし おもひ草。



第五十八図

立花 梅擬除真

西村松庵

梅擬 薄 松 仙翁花 柘植 熊笹 柏

桔梗 檜扇

雁^{がん}緋^び

祝言。中横に遣わす。

異名、剪^{せん}羅^{らか}花（葉ならび生じて剪のごとし。

又花の形まどかにしてはさみなすがごとし、故に名付く。）。

松本仙翁^{せんのおけ}花

右に同じ。

仙翁花

祝言、正心より中まで下る。

漢宮秋。嵯峨の仙翁寺より始めて出る故に名付くと云えり、覚束なし。

和名、紅梅草。

古歌

秋の野の紅梅草の色みれは春の心をまかせつるかな

右の三花は、本一草なれども時節^{ちせく}遅速あり、花も多少あるゆえ後人これを名付けならし。この花、瓶に指して水を欠くればしおるる也。

正心に用いる時小輪なるは宜^{よろ}しからず。二本にても三本にてもくみあわせて立つべきなり。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』

『花道古書集成 第一期第二巻』

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』

第十図

立花 松除真

除心の内行の花形 流枝持立 富春軒

松 苔 百合 仙翁花 著我 木槿

柘植 嫩 小羊歯 桔梗





赤花満作

あかばなまんざく

〈表紙の花〉 仙溪

花型 草型 留流し

花材 満作（満作科）

数椿（椿科）

花器 陶花瓶「追想」（小川欣二作）

マンサクは早春に黄色の糸状4弁花を枝一面に咲かせる。マンサクより花が大きいシナマンサクは花色が濃く甘い香りがする。マンサクとシナマンサクの交配で多くの品種が生まれている。

アカバナマンサクは異国の感じがする。西洋的な図柄の花瓶に椿を合わせて生花にした。

河津桜

かわづざくら

〈9頁の花〉 仙溪

花型 草型 留流し

花材 河津桜（薔薇科）

花器 銅花瓶

京都駅での河津桜の生花。枝本来の姿を生かしてのびのびといけた。



初日の河津桜。上の写真は7日目。



花桃

はなもも

仙溪

花材 桃 (薔薇科)

菊 (菊科)

花器 紫檀色釉花瓶

いけばな花材として生産されるのは矢口桃という八重咲き品種が多い。産地では早くに枝を切つて束にして水揚げをし、出荷する日に合わせ、遮光した20〜25℃の室(むろ)に約1週間置く「ふかし」を行う。空調や温度、湿度の管理が難しい。「立花時勢粧」には「枝ぶり素直にしてはたきなく・・・かわりたる花形も出来ざるものなれど」と書かれていて、桃を真にした立花には曲がりのある伊吹と優雅に枝垂れる山吹を加えている。

現代の盛花や投入では桃の素直さを生かしつつ、枝の勢いと花の優しい美しさを引き出した。

桃と菊はどちらも中国生まれの日本育ちなので相性がいい。素直に両者を投入にした。

横から見た奥行き





毎日ステーキ

健一郎

花型 砂の物

花材 松（松科）

白梅（薔薇科）

椿（椿科）

花器 銅砂鉢

「健ちゃん毎日ステーキを食べられる性格だな」と言われた事がある。同じことを新鮮そうにしている私のことを揶揄したものだ。祖父からの遺伝なのだろうか。毎日でも食べたくなる。実際にお肉を毎晩食べたいと副家元提案して見たら霧吹きで返り討ちにされた。今だけに妙案だと思っているのだが。

なぜ毎日お肉を食べることができののか分析して見たところ、どうやら感謝の気持ちと、今を感じる力が毎日お肉を美味しく食べるための秘訣なのではないかと思う。今を感じる力はその時の自分のコンディション、一緒に食事をする相手、話す内容など、毎日同じものではなく、その日その日の今を生きる力のことを指す。見かけの上では過去の場面と酷似しているように見えても全く別物だ。

日日は好日

あまりにも有名な雲門文偃（唐末の禅僧）の言葉だ。色々な解釈があるとは思いますが、私は肩肘を張らずにあくまで自然体でその時その時を全身で感じることで

はないかと自分なりに解釈をしている。

日々の出来事を新しく感じるためには豊かな感性が必要だ。同じものを見ても、人の数だけそのものを見た時の感じかたは異なる。Tボーンステーキを見た時に、アメリカみたいなステーキという解釈をする人もいれば、サロインとヒレの2つの味が楽しめるステーキで骨から近い部位なので骨液から旨み成分が染み出て美味しいよねと感じる人もいる。二人ではもちろん後者の方がお肉を毎日食べられそう。

物事を細かく捉える力が洗練されていくと、みんなにとつての同じものが同じもので無くなる。

今大学4年目の春休みを迎え、毎日自分のしたいことでスケジュールはいっぱいだ。どれも自分の興味を追求するものばかりで、大忙しだ。手当たり次第に片っ端からしたい事をする。将来になりたい自分と、自分の興味が一致しているのがまた面白い。今回の立花もしたいことの一環であり、将来になりたい自分に近づくための一歩である。

明日の事を考えると鼓動が早くなり、眠れなくなることがよくある。明日は何をしよう。あまりにもしたいことが多すぎて自分が今ここにいない時がたまにある。禅のトレーニングの一環で一ヶ月の間ステーキを食べるという提案を、改めて副家元してみようと思う。



シデコブシ

仙溪

花材 幣辛夷（木蓮科）
シデコブシ（蘭科）

花器 天目釉壺

普通のコブシよりも細長い花弁を
注連縄に吊す幣（紙垂）に見立てた
名前。白花の他に薄紅色の品種があ
る。コブシは6弁花だがシデコブシ
はもっと多くて花により枚数が違う。
黄色の蘭とすつきり2種でいけ
て、春の訪れを感じる投入に。



横から見た奥行き

レモン日より

健ちゃん卒論を手伝ってます。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019 年
4 月号
No.670

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





レオントキール

△2頁の花▽ 桜子

花材 レオントキール(アルスト

ロメリア科)

キヤスケード・シンビジウ

ム(蘭科)

ミリオクラダス(百合科)

花器 赤ガラス花瓶

レオントキールはライオンの手という意味だそう。アルストロメリアの仲間、南米原産の蔓性植物。地面を這うように育ち、伸ばした花茎の先に丸く花が集まってつく。元々寝そべっていたもので、あまり無理な長さにいけると茎の途中で折れるので注意したい。

キヤスケードタイプのシンビジウムをからめるようにいけるとレオントキールとよく調和してくれた。背の高い赤いガラス花瓶に無造作に投入してみたが、花材の面白さで独特の雰囲気がつくれた。

横から見た奥行き



△ 表紙の花の解説は5頁 ▽



ビオットの陶器

〈3頁の花〉 仙溪

花材 オクロレウカ(菖蒲科)

鉄線4種(金鳳花科)

花器 緑釉陶鉢(フランス製)

この緑の陶鉢はフランス製。表紙の紺色の陶鉢も同じで、刻印から



調べるとビオットの陶器だとわかった。ビオットは南仏ニースとカンヌの間に位置する街で、古くから製陶で栄えたが、今はガラス工芸も加わっている。

この2つの陶鉢は父・仙齋が好んで使っていた。父がいきたい花をすんなり受け止めてくれる不思議な器だ。たっぷりとしたモダンないけばながよく映る。

横から見た奥行き





木瓜と椿の生花 健一郎

花型 草型 副流し

花材 木瓜（薔薇科）

椿（椿科）

花器 天女文銅花瓶



ベトナムにて

健一郎

ベトナムに着いても実感が湧かずにいた。ツアー旅行では1人でどこかに行くことがなかなか難しい。次の日の朝は早起きをしてホテル周辺を探索してみることにした。

ホテルから一歩出るとタクシーはもちろん、バイクの2人乗りで駅まで送ってくれる人で溢れかえっている。「안녕」「你好」「ここにちは」下手な鉄砲を幾つも駁（か）わしながら目抜き通りまで歩いた。すると前輪が2つ後輪が1つの三輪自転車の前に座席を取り付けた人力タクシーのお兄さんが拙（こた）い日本語で乗らないかと話しかけてくる。断って散歩を続けようとしてもしつこく乗らないかと言ってくる。乗りませんときつづく言

ミモザアカシア

〈表紙の花〉 櫻子

花材 ミモザ（豆科）

エビデンドラム数種（蘭科）

花器 紺釉陶鉢（フランス製）

3月3日の倉敷でのお稽古は新鮮なミモザをいけさせていただいた。お弟子さんの庭に育っていたもので、フワフワの花の付いた切りたての枝を沢山持つて来てくださったので、バラとマーガレットを取り合わせて贅沢な稽古をすることができた。お弟子さん達も大喜び。

ミモザが黄色い花をつける季節、毎年3月8日は国際女性デーらしい。イタリアではこの日、男性から女性にミモザの花を贈り、女性達は家事からも育児からも解放されるそう。なんと羨ましい。残念ながら日本にはそんな習慣はないが、ミモザのお蔭で貴重な春の楽しいひと時になった。テキストではカラフルなエビデンドラムと取り合わせた。

横から見た奥行き



ベトナムにて

健一郎

ベトナムに着いても実感が湧かずにいた。ツアー旅行では1人でどこかに行くことがなかなか難しい。次の日の朝は早起きをしてホテル周辺を探索してみることにした。

ホテルから一歩出るとタクシーはもちろん、バイクの2人乗りで駅まで送ってくれる人で溢れかえっている。「^{おはよう}안녕」「^{你好}你好」「^{ここに}ここには」下手な鉄砲を幾つも躲かしながら目抜き通りまで歩いた。すると前輪が2

つ後輪が1つの三輪自転車の前に座席を取り付けた人力タクシーのお兄さんが拙い日本語で乗らないかと話しかけてくる。断って散歩を続けようとしてもしつこく乗らないかと言ってくる。乗りませんときつく言

い返そうとしたタイミングで握手を求められた。いざ握手をしてみると感じの良さそうな人だったので乗ることにした。運転手によるとこの乗り物はシクロというらしくなかなか乗り心地が良い。どこか行きたいところはないかと聞かれた。ベトナム人の生活が見たい旨を伝えると、ハンドルを反対に切り、細い道に入った。そこで見た光景はまるで映画の中に入り込んだような世界だった。

学校に行く前に外の屋台で朝食を済ます学生、2人乗りのバイクに4人で乗る家族、バイクの5倍もある荷物を上手いこと運んでいる様はまるで曲芸師のようだった。携帯電話で写真を撮ろうとするとバイク乗りに盗まれる可能性が高いらしく、そういう状況では好奇心が更に強く刺激される。1時間ほどガイドしてもらった後80ドルを支払ってホテルに帰った。後から聞いた話によるとベトナムの物価では2ドル〜3ドルで乗れるらしい。完全主にしてやられた。握手をした時に勝負は決まっていたらしい。

今世界のどこに行ってもあるブランド街や、観光地の大衆化でその国ならではの文化が過去のものになりつつある。各地に散りばめられている、僅かな歴史の残り香を嗅ぎ分けられるように嗅覚を鋭敏にしておきたい。全身でその土地を感じ、生け花で表現をする。そんな贅沢な事を是非してみたいものだ。

立花秘傳抄 三

草之部 (つつき)

檜扇ひのうぎ

祝言。心に用いる。上中下。

射干からすおうぎ
しゃかん

名付く。

扁竹(その葉偏生にして根竹のごとし)。

鬼扇きせん

他人掌たじんしょう 鳳翼ほうよく (みな形によりて名付く)。

く。

藏玉集

よもぎふはさることなれや庭の面から

す扇のなと茂るらん

檜扇瓶毎に用いるといえど、能く遣う人まれなり。初心の内はかこいに用い、間あきをふさぐ物とのみおもうにより替わりたる手もなく、意気はづみも出きざるなり。巧者は心を付けて指すべき事なり。



草花砂物草

中野氏

第百十八図

一株砂物 檜扇真

草花砂の物草

中野氏 (初版は富春軒仙

溪)

檜扇 芦 杜若

仙翁花 百合

擬宝珠 小菊 桔梗

檜扇を多く遣いたる立花には、大葉はたらかず、又芍薬に取り合いよろしからず。よくよく心を付けて用いるべし。

薄^{すすき}

祝言。上より遣い下りて中までも下る。通用にあらず。

蕉草。大きなるを芭蕉と云い、小さなるを石毛と云う。

和名、尾花。袖波草。乱草。

立花名、萩すすき。冬薄（冬がれせぬすすきなり）。

高倉院齋合歌

我宿の庭にまれなる露會草かたよるはかり風やわたらん

天智天皇花尽異名

水はなし風にこそたつ波はたた^{しき}沢波草を折にまかせよ

薄の心は葉付き面白を見立て、もしはたらしなき時は二本合わせて一本に見ゆるように細工して指すべし。又心にうら葉ばかり見ゆ

る時は、表葉を外にあしらうべし。

薄は葉多く付きたりとも、茎一本に見ゆる時は陰陽不合とてこれを嫌う。たとえ葉二枚立てるとも茎を見せずして立てる時は二もとと



第十九図

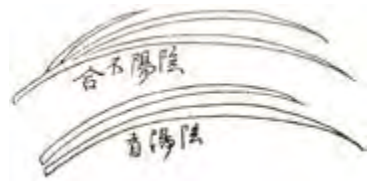
立花 薄除真

除心の内行の花形 左流枝立 林昌

薄 菊 松 梅擬 熊笹 柘植 小菊

夏はぜ 小柏 著我

見なしてこれをゆるす。



薄ひらめに遣うをよしとす。副ばかり、請ばかりに遣うを片なびきという。心、請、副と両方に立てるを両なびきと云う。片なびきは古風なり。もろなびきはたらきあり。さりながら法度にあたる事多し。

薄二枚三枚遣うとも、茎一本に葉をいまいづつ付けて遣えば、葉のはたらき自由なり。又茎をたむる時は頭より竹釘をさせばためもどろず。

すすきは副、請の物とばかり思いて遣う時はかわりたる手もなし。つや、あしらいなど

に遣う時は珍しきもあらかし。

唐黍

祝言。上中。

玉蜀黍。蜀黍。とうきび 葉使い薄に同じ。



筑摩九郎右衛門

第六十四図
立花 梅擬除真
筑摩九郎右衛門
梅擬 薄松 松笠 菊 椿 柏 水仙 嫩



シャルロット

仙溪

花材 虫狩(忍冬科)

ラナンキュラス(金鳳花科)

花器 陶花瓶

洋菓子にシャルロットというのが
ある。女性の帽子に見立てたケーキ
で、パン、スポンジケーキ、ビスケッ
ト、クッキーなどを型の内側に貼り
付け、その中にフルーツのピュレや
カスタードなどを詰めて冷やしたも
のである。ラナンキュラス・シャル
ロットもケーキのシャルロットのよ
うに、女性がときめく夢のような花
である。

沢山の花をつけた立派なムシカリ
を見つけたとき、ラナンキュラス・
シャルロットと出会わせてみたいと
思った。山育ちの青年と都会育ちの
令嬢の組み合わせ。微妙な緊張感が
ただようのはつなぎ役の緑を加えそ
こねたからだろうか。

横から見た奥行き





シロバナハナズオウ

△10頁の花▽ 仙溪

花材

白花^{しろはな}花蘇芳^{はなすおう}（豆科）

芍薬^{しゃくやく}（牡丹科）

鳴子百合^{なるこゆり}（百合科）

花器

市松文陶花瓶

ハナズオウは葉が出る前に赤味を帯びた紫色の花を枝いつばいにつける。春のいけばな展でときどき使われているが、普段の稽古にはあまり出てこない。白花の品種に赤い芍薬をとり合わせて投入にした。

スオウとハナズオウは同じマメ科ではあるが別の植物である。スオウからは黒みを帯びた赤色の染料が採れ、この色を蘇芳色^{すおういろ}と呼んでいる。ハナズオウの花は枝に直接つくので、枝全体が赤紫色に染まって見える。花色は蘇芳色というよりも、スオウで明るめに染めた布の色に近い。スオウで染めた布を枝にまとうているみたいな木ということだろう。

ハナズオウはマメ科・ハナズオウ属の落葉低木で中国原産。スオウはマメ科・ジャケツイバラ属の小高木でインド、マレー半島原産。スオウは古くに渡来しており奈良時代以降、貴族や僧侶の衣服を彩ってきた。もうすぐ行われる皇位継承の儀式でも、スオウで染めた衣を身につけられるかもしれない。



シャクヤク

△11頁の花▽ 仙溪

花材 満天星（つばき）（躑躅科）

芍薬2種（牡丹科）

花器 染付花瓶

春のいけばなにシャクヤクは無く
てはならない存在になってきた。暑
さに弱く、水揚げもいいと言いが
たいが、大輪種も小輪種も丈夫で美
しい品種が出て来るようになった。
葉のしつかりした品種なら緑の枝も
のとシャクヤク2種でいい。葉がた
よりなければナルコユリなどで緑を
補いたい。

シャクヤクはボタン科・ボタン属
の多年草で中国北部～朝鮮北部原
産。日本へは古く生薬として渡来し
ている。英名はジオニーで、ギリシャ
神話の医の神ペオンに由来するが、
ギリシャ神話に登場する花がシャク
ヤクだったかは定かでは無い。
ドウダンツツジと芍薬は相性がいい。

横から見た奥行き





コデマリ チューリップ

仙溪

花形 生花 草型 副流し

花材 小手毬（薔薇科）

チューリップ（百合科）

花器 陶水盤

コデマリの生花は枝振りを生かすことが肝心。真の枝は中心線をまたいで垂れ下がるが、枝の上部が中心に乗るようにバランスをとる。撓める時は枝の気持になつてストレッチするごとく撓めるといい。

横から見た奥行き



レモンだより

健ちゃんなにしてんの！。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019 年
5 月号
No.671

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



令和

5月1日、元号が「平成」から「令和」へ変わった。

先日、倉敷で開催された桑原専慶流いけばな展で、岡山県本部の小野樹仙会長が挨拶の中で次のように教えて下さった。

人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ

「令和」にはそんな意味が込められているそうだ。

令和の時代に華道がどんな役割を果たせるか。人々が美しく心を寄せ合えるような花を、皆さんと共にいけてゆきたいと思う。

五月梅 さつきばい
撫子 なでしこ

△2頁の花▽ 仙溪

花材 五月梅（雪の下科）

撫子（撫子科）

花器 青磁花瓶（加藤敏雄作）

サツキバイとナデシコを大らかに投入にした。青磁の花瓶にいけると5月の爽やかな風を感じる。サツキバイは水切りし、足元をよく割っておく。

△ 表紙の花の解説は8頁 △





横から見た奥行き



利休梅 薊

△3頁の花▽ 仙溪

花型 生花株分け

花材 利休梅（薔薇科）

薊（菊科）

花器 陶水盤

リキウウバイは中国原産の落葉低木。バラ科・ヤナギザクラ属で明治時代に渡来した。

あばれた枝を生花にしたが、撓めたところもよく水が揚がっていた。アザミと株分けにしたが、相性が良さそう。

横から見た奥行き



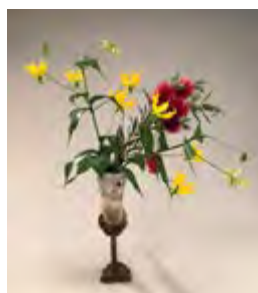


ジョージアの角杯かくはい

健一郎

花材 プラシノキ(フトモモ科)
黄タダロリオサ(百合科)
花器 角杯(ジョージア製)

ジョージアの蜜のみの市いちで手に入れた
ワインを飲む角杯。ホテルの部屋
ではラッパスイセンを飾って楽しん
だ。赤ワイン色のプラシノキがよく
似合う。



横から見た奥行き



ジョージアの国旗。アナヌリにて。

卒業旅行

健一郎

大学生生活最後の春休みにあたり私の卒業旅行という名目で初めて家元と服家元と3人だけで旅行をしてきた。大学の成績が1単位足りなかったので実際の卒業は半年先だが。

旅行先はワインとパン、ヨーグルト発祥の地であるジョージアという国。目的は食事、自然、芸術だ。元ロシア領で旧国名はグルジア。黒海とカスピ海に挟まれたコーカサス地方にある。交通の要衝であったため古代から諸外国の侵略を受けてきたが、ソ連崩壊とともに1991年共和国として独立した。

未知の国なので3人とも好奇心を否応なく刺激される。首都トビリシの地下道に落書きがあった。



「ムンクや!」

「壁に落書きをしないでってこと?」

「権力にペンで対抗してる絵かな?」

「いんでペンでんす? (独立の意)」

『叫び』は不安や絶望を象徴してるから、ひよつとしたら政府が市民たちの反乱で、てんでこまいになってるんっちゃうか?」

感じた事をテンポよく言い合うので複眼的に物事を捉えられる。単眼になりがちな私にはちょうど良い。

トビリシからの日帰りツアーを現地で申し込んで小型バスに乗る。鳥の糞が媒介となつて他の木に寄生するヤドリギという植物が、同じ種類の木に数多くできていたのを疑問に思った。すぐさま2人に質問をぶつけてみた。

「鳥がお尻を拭きやすいからかな?」

「木も選んでるんでしょ」

「宿りやすい木があるのと違う?」

様々な意見が出てきてさらに考えが広がる。事実はどうだっていい。実際に自分達が鳥や木の気持ちになつて考えてみるのが面白いのである。家元が演じる鳥の気持ちと、服家元が演じる宿られる木の気持ち、そして私のヤドリギのタネの気持ちはインターネットには載っていない。それぞれ一役終えるともた頭の途中で各々、別の役になる。3人のそれぞれに偏った知識と想像力を、俯

瞰してみるのが面白くて楽しい。

旅行に出かけると様々なアイデアが生まれる。時間を気にしないで生活できる旅行は心にとりを持たせ、普段気にも留めないことにも関心を抱く。私が思うに忙しい空間では芸術は発展しにくく、想像力も働かない。普段は意図して時間を作り御所なんかを散歩して満足してみる。旅行はやはり特別なものである。できればその旅行は分刻みで有名な観光地を巡る観光の旅行ではなく、その地域の人とコミュニケーションを取つてみたい、その地元の人を実際にしてる生活をのぞいて見ることがより好ましい。新たな価値観や感性を垣間見ることができるといい。もつとも観光地の中でもその人の持つ技量によつては美的感性を磨くこともできる。

ここ最近、私の旅行に行く目的は感性を豊かにすることにある。非日常の空間では多くの発見がある。今年の春の8回の卒業旅行では、特に意識することができ、様々なものに想いを馳せてきた。有機物も無機物も関係ない。多角的に物事を捉える練習をしている。まだ22年しか生きていないが、今のところは人生の豊かさは「感性の豊かさ」にあると考えている。お金と違って使つても使つても無くならず、使えば使うほど豊かになっていくのも気に入っている。そしてそれは自分の頭で考え

られなくなるまで貯蓄できるらしい。

心の動きの分かりやすい指標として涙というものがある。一般的に感情の涙というものは感情が高ぶった際に最も多く分泌されるらしい。

競争心が強い私は弟の順之助にボーリングで負けるとトイレに行き目を腫らして帰ってくる子供だった。私の強かった私はそれ以降もほとんどが悔し泣き。ところが去年の夏のマンチェスターで木の枝をきらせてもらった時に号泣してから、悔しさ以外のことで目に涙を貯める事が多くなった。昨日は三条通商店街で「よさこい踊り」をしている懸命さに目頭が熱くなった。なんて楽しそうなんだろう。そこから広がるその人のストーリーを想像してしまう。

いつかなんでもない空を見ただけで涙を流せるようになる日でもくるのだろうか。ただ美しいだけで涙した経験がまだ無い。それは美しいものを見ていなかったのではなく、美しいものを見れる自分にまだ成れていないからであろう。

なんでもない空に涙する人が生けた花はどんなに強く、美しいのだろう。

半年留年してできたこの時間に、感動の数珠を下げる訓練をしようと思つた。



ジョージアの東端 シゲナギのボドウベ修道院。グルジア正教会は厳粛なので、女性はスカーフ、スカート姿でないと入れない。



「ワインを飲む人」の銅像。原型は紀元前7世紀のもの。角杯を持って宴席を盛り上げる役目の人だそうだ。トビリシにて。

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む(57)

立花秘傳抄 三

草之部 (つつき)

鶏頭花けいとうげ

祝言。心、正心。

鶏冠花けいとうげ、掃帚そうしゅう、扇面せんめん、瓔珞等ようらくの名あり。皆

この花の形を以て名付く。

鶏頭自然と横へ生えたるあらば、副にも用いる。心、正心にかぎらず、三本立てる時は二本は同色、一本は色かわりても苦しからず。三本ともに色をかゆる事をきうつ。

鶏頭は花おもき物ゆえ、心に用いる時はひくく立つべし。正心に用いるは扇面を取りまぜ遣うべし。花の丸きばかりははたらきなし。梅もどき、水木などに立て合わせる時は、白色黄色を用うべし。

旋覆花おくるま

祝言。水ぎわ。

多識に、かまのつば (小車高き草なりといえども古来水ぎわに用い来る。)



第六図

立花 鶏頭直真
直心立之内草の花形 富春軒仙溪
鶏頭 柳 梅擬菊 夏はぜ 擬宝珠
檉木 檜扇 伊吹

黄精おうせい

祝言。水ぎわ。

和名、おほえみ。あふし。

蒲公英たんぽぽ

祝言。水ぎわ。

多識に、大丁草たんぽぽ。

異名、金簪草きんさんそう。

紅花

祝言。中より水ぎわまで。

多識、紅藍花。

和名、すえつむ花。

だんどく花

非祝言。心に用いる。上中。

心に立てる時は正心に立て、或いは副下、

請下へ葉ばかりをあしらうべし。うこん草同

前なり。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三卷 立華時勢粧』（日本華道社刊）

『花道古書集成 第一期第二卷』（大日本華道界刊 思文閣出版刊）

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』（思文閣出版刊）

第五十図

立花 鶏頭直真

恭圓

鶏頭 芦 菊 薄 梅 擬 柘 植 松
晒木 檉木 柏 檜 著我



黄精Ⅱ鳴子百合？

だんどく花Ⅱカンナの種類

貝母^{ばいも} △表紙の花▽ 櫻子

花材 貝母（百合科）

海老根（蘭科）

都忘れ2色（菊科）

花器 陶水盤（モロッコ製）

倉敷の叔母宅には月一度の稽古で訪れるが、特に春は庭の花々を見るのが楽しみ。珍しい椿や林檎、花梨といった果樹の花も華やかだ。

高台にあるリビングの前庭には大きな木が茂っていて、その足元でバイモが70センチほどの背丈で咲いていた。花は小さくて地味な色なのにとても存在感があつて可憐。いくらでも持つて帰つてと言ってくれるので、沢山切らせてもらった。

バイモはユリ科の中では一番早く咲くらしい。葉の先端が細長く巻きひげのようになるのが可愛い。球根が大きくなると貝が合わさったように見えるので貝母と名づけられたそうだ。

叔母の庭で育つ貝母は花屋さんでは買えない大きさなので足元には春のエビネランとミヤコワスレをいけた。



横から見た奥行き



第70回 京友禅競技大会 插花

松除真立花

仙溪

花型 松除真立花

花材 松(松科)

晒木

桃(薔薇科)

椿(椿科)

紫蘭(蘭科)

橘(蜜柑科)

花器 銅立花瓶

元禄時代の京都において人気を博した扇絵師、宮崎友禅斎の描く画風を着物の意匠にとり入れたのが友禅染めのはじまりとされる。この手描友禅に対して、明治時代以降には型紙に模様を彫って染める型友禅が加わり、京の友禅染めは飛躍的な発展をとげた。

京友禅協同組合からのご依頼で、京友禅の展示会に、京都いけばな協会から会長の私と芦田一馬常任相談役が插花させていただいた。

私が白地の着物の前に松の立花を飾り、芦田先生が黒地の着物の前に桜の生花をいけられた。芦田先生の桜の生花は、まさに着物に染められた絵柄のように美しかった。

展示会場にはインクジェットで染めた着物もあつて驚いた。着物の普及に一役買うだろうが、大切なのは作り手のセンスなのは間違いない。着物もいけばなも、伝統を現代に生かそうとする情熱と、基本を習熟した上での洗練された感覚が求められる。

第70回 華道京展

テーマ 「始まりは今、華道」

会期 4月4日(木)～9日(火)

会場 大丸ミュージアム〈京都〉

【流派席 前期展・後期展】11頁

【1人席 前期展】

桑原健一郎(前期展)

木瓜除真立花

木瓜満天星 貝塚伊吹

九輪草

銅立花瓶

写真① 正面

写真② 裏面

第70回の記念展にあたり、京都の芸術系4大学の陶芸作家に日頃の作品を出品いただいていたけぼなどのコラボや、表裏両方から見る事が出来るいけばなに挑むなど、いけばなの可能性を探る花展となった。

健一郎の小品立花は本人にとって良い経験になったようだ。京都精華大学の家山さんによる作品のお蔭でユニークないけばなが生まれた。

キャスケード・シンビジウム
スプレングリー

コスタボダ赤色ガラス花器

(モリカ作)



③



②



①

写真①② 二方正面小品立花

小さなサイズの立花は立てるのが難しいが、なかなか味わいの深いものである。そして立花を後ろから見た姿の意外な美しさも、自分で立ててみて初めて感じる事ができる。花の後ろ姿もまた美しいものである。バランス良く立てられた立花はどこから見ても景色になっている。

京都東山花灯路2019

仙溪

会期 前期3月8日～12日

会場 円山公園枝垂れ桜前

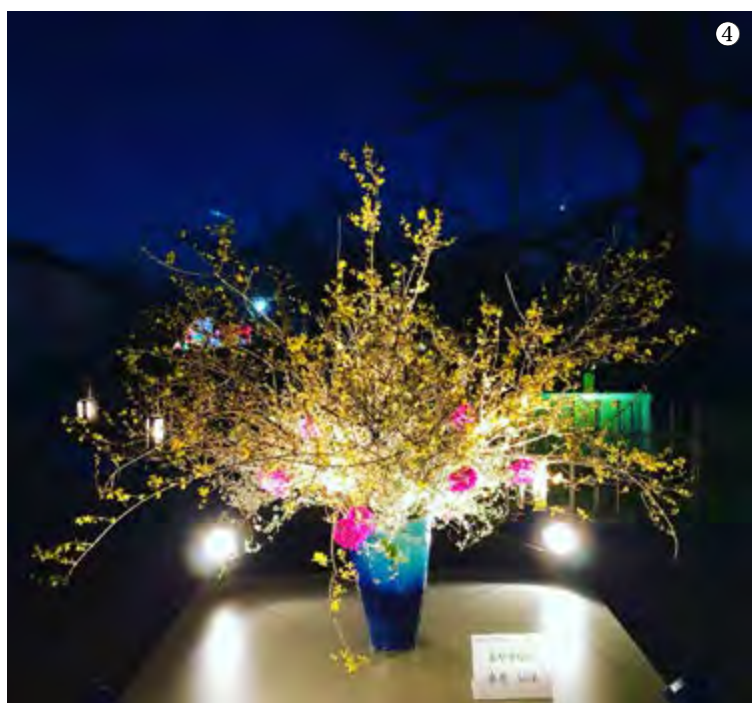
花材 連翹(木犀科)

雪柳(薔薇科)

エビデンドラム(蘭科)

花器 陶花器

力強いレンギョウの太枝は強風にも耐えて5日間精一杯咲いてくれた。



④



【 流派席 前期展 】

陶芸作品コラボ（家山美祈作） 山帰来の根 鉄線5種 赤色ガラス花器
海堂桜 雪柳 板屋楓 彩泥花器（宮下善爾作）



【 流派席 後期展 】

陶芸作品コラボ（家山美祈作） 晒木 チランドシア2種
ネリネ オンシジウム ベゴニア 碧色陶花器（竹内真三郎作）
満天星 杜若 乙女百合 晒木 緑釉陶コンポート（宇野仁松作）



落葉松と芍薬

仙溪

花材 落葉松（松科）

芍薬2種（牡丹科）

花器 煤竹手付籠（公長斎小菅）

カラマツの芽吹きを初めて見たとき、イソギンチャクのように思った。なんとも愛らしい姿である。カラマツの生まれたての若葉を見守るように、濃赤色と薄紅色のシャクヤクを添えた。飴色の籠が優しく受け止めてくれている。

横から見た奥行き



レモン日より

シャガの花とレモンちゃん。



いけばな

桑原専慶流

テキスト

2019 年

6 月号

No.672

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





物のこころ

仙溪

昔、年配のお弟子さんに「物にも心があるんですよ」と言われたことがある。京都で袋物を扱う店をされていて、手作りの物へのこだわりを持たれていた。作り手の心が物に移り、そこへ使う人の心も重なっていくと。

その人のお孫さんが先日お越しになって美しい竹籠を頂戴した。お祖母さまが生前愛用されていたとのこと。とても上品な籠化入れである。

作者は丹波篠山の箕浦竹甫さん（1934～2010）。田辺一竹斎さんに師事して技術を習得。篠山特産の雲紋竹を活用した竹工芸作家として活躍され、その技術は篠山市の無形文化財に指定されている。

丹波篠山の竹は竹細工に向いている。固すぎず柔らかすぎず。固いと折れるし、柔らかいと虫が食う。そんな地元の特性を生かした竹籠づくりに情熱を注いだ箕浦さん。きっとその箕浦さんの人物に惚れ込んで手に入れたものなのだろう。そんなことを思いながら眺めていると、籠に対する愛着が増してきた。

籠を思いながら花屋に行くと、3色のハナショウブが目にとまった。季節の品格を備えた花だが、過去に籠にいたことがない。この籠の心が私に作用したのかもしれないなど不思議に思う。竹籠を入れた桐箱には「花籃」と書かれていた。雅な心が名前にも込められている。



花菖蒲 卯の花

ハ2頁の花 仙溪

花材 花菖蒲 (菖蒲科)

卯の花 (雪の下科)

花器 手付花籃 (箕浦竹甫作)

水盤でいけることが多いハナシヨ
ウブだが、籠に上品に納まってくれ
た。



オウゴンミズキ

ハ3頁の花 仙溪

花材 黄金葉土佐水木 (満作科)

芍薬 (牡丹科)

花器 ミリオクラダス (百合科)

面取陶花瓶

色彩は花色だけではない。葉色の
美しさもいけばなの大切な要素だ。





南天若葉の立花

健一郎

『やつてみなはれ』家元は何を提案しても首を縦にしか振らない。道徳的に間違っていないければ何をしてもいい家である。そんな中、ここ数年で初めて首を横に振った提案が、この南天の新芽を使った立花である。確かに南天は冬を代表する花の1つで正月によく使われる。赤い実が愛らしい。花の命を大事に思った上で最高に美しいタイミングでお花を摘み取り器に生ける。そのためむやみやたらに花を生けることはできない。

植物には旬しゅんがあり、どの時期が一番美しいのかも幼い頃から教えられてきた。南天の旬は冬だと分かっているが、新芽の青々とした南天を眺めていると、それは大層魅力的に見えるのである。

ここ最近物事の見方が変わってきた。花の旬という概念があやふやになってきた。どの瞬間を切り取っても、その時にしかない美しさがあると思ってしまう。発芽した時の愛らしさ、青々とした新芽、花が咲き、枯れ、老木になつてさえも魅力は存在し続ける。それぞれが全て美しく、好みはあれど、その美しさに差はない。

どのタイミングであれ、花の命を摘み取り、人間が綺麗だと感じられるように器に再現する「華道家」。

それは神様のようにも思えるし悪魔のようにも思える。少しでも花の事を正確に知り、敬意を表す事は必要最低限の花に対する礼節でもある。もともとこれも人間側の都合なのだが。

一方で、植物が生物界を支配しているという考え方もある。地球上の生物量（バイオマス）の内、99.5%は植物の細胞が占めているらしい。地面、空気、太陽だけで生活することができ、常に捕食者たちから狙われていたために、リスクを分散しており、どの部分を食べられても死を迎えるわけではない。植物の死の曖昧さにはいつも頭を悩ませられる。種によつては様々な虫や動物たちを手玉に取り花粉を運ばせている。いつからか、この虫や動物の中に人間という生き物が含まれている気がしてならない。人間に気に入られた種の繁栄は人間が滅ばない限り保証されている。

人と植物の間わりは複雑だが、『やってみなはれ』という魔法の言葉で、私はいつしかいけばなの世界に引き込まれてしまった。そして花を敬う気持ちも次第に強くなってきた。私と植物の間わりは、より広くなり深くなつてゆく。

黄花海芋 きばなかいよう 大手毬 おおでまり

△表紙の花▽ 櫻子

花材 黄花海芋（里芋科）

大手毬（忍冬科）

ミリオクラダス（百合科）

花器 ガラス鉢

アンティークピンクのオオデマリと赤いガラス器のハーマニー。



横から見た奥行き

新緑の立花

△4頁の花▽ 健一郎

花型 除真立花 のきしん

花材 南天（目木科）

五月梅（雪の下科）

大手毬（忍冬科）

貝塚伊吹（檜科）

杜若（菖蒲科）

花器 陶花器



立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ⑤8

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

菊

祝言。心に用いず。大輪は上より中まで。

中輪は中より水際まで。小輪は水際ばかり。

菊の字本鞠しもときくに作り鞠に従う。鞠は窮きくなり。

秋に至りて万花窮尽きくつじんす故之を菊と曰う。

異名、隠君子いんくんし。紫毬しきゅう。

和名、かわらよもぎ。百夜草。契草(古事

を以て名づく)。菊草あきしべくさ。星見草。

承和菊そがぎくと云うは黄菊なり。これ菊の正色な

るゆえ帝愛し給うとぞ。

蔵玉集

長月の九日に咲いなど草花は八重にてよろず代や経ん

浅ちふもましる草葉もかるるまで野にの

こりける秋しべの花

名にしあふあつまの野べのこかね草これ



第百三回

立花 菊一色

菊の一色真 桑原次郎兵衛

菊 小菊

もみつきの数につままし

一色の心はふとく葉茂り枝多きをよしとす。大輪の菊にはまれなる物ゆえ、古来中菊をゆるして今も指すことにこそ。然れども大輪小輪上下相そむき、出生の景気うつらず。当流これを用いず。

一色を立てる時、流枝になる菊まれなる物なり。胴作りには葉菊とて猩々、加賀紅、大津物ぐるい、などの花さかぬ葉ばかりの茂りたるを用いる。これをしかみ葉とも云う。

菊の一色、近代は初心の人もみだりにこれを指す。誠に似たる事の似ぬ事なり。たとえ裏菊をさしたりとも、いかなる道理あると云う事を知べからず。又道理を知りたりとも一瓶の菊、ことごとく意気はづみ、色、つや、うつりよく、大中小花の品々をわかち、一種の色どりよく、うすからず、あつからず、しかも花形風流に指し得る事かたかるべし。惣て一色物は、師伝と修練との二つかけては



第四百四図
立花 菊一色
菊の一色行 富春軒
菊 小菊

叶うべからず。

一種の菊を請、副に両方へ遣う時、縁のつづけ様口伝あり。

菊の葉遣い綺麗に見せんとて、一枚一枚系もてくりつくろいたるは、さぞや造作ならめと見る目もいとくるし。名ある人のせざることなり。

菊は花より葉の能しを賞翫とす。葉しおれたらば一夜さかしまに井に釣るべし。茎にゆがみあらば火にてため、或いは竹を結いそえ、横へ出すは針金を用いる。小菊は紙をまきてその上をたむる。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三卷 立華時勢粧』（日本華道社刊）
『花道古書集成 第一期第二卷』（大日本華道界刊 思文閣出版刊）

同砂之物



第百五図

立花 菊一色

菊の一色砂之物 専定寺（初版は暁春軒）

菊 小菊



葉蘭生花

ハラン
〈9頁の花〉 仙溪

花型 生花 行型
花材 縞葉蘭（百合科）
花器 陶花器



レモンだより
新聞を読む邪魔をするのが好き。

日本いけばな芸術中部展
 テーマ「新たな歴史への夢」
 会期 4月10日㈪～15日㈮
 会場 松坂屋名古屋店

④



⑥



⑤



⑦



①



②



③





初夏の杜若生花 かきつばた

健一郎

花型 生花 三花五葉 行型

花材 杜若 あやめ（菖蒲科）

花器 祥瑞染付水盤 しんずい

この生花をいけた後で、大田神社の沢に群生する杜若を見に行った。緑の中に浮かぶ紫色。花の格を見せつけられた。その姿は尾形光琳の『燕子花図屏風』を彷彿とさせた。光琳は杜若とどれだけの時間向き合っていたのだろう。杜若の格をよくよく表現できていると感心する。

先日、生まれて初めて絵を描き始めた。バイクで京都北部の美山へ行った時、見た景色を絵に起こしてみたいと思ったのだ。奥の方から山の谷に沿って川が流れ、目の前には藤がこれでもかというくらいに咲きそろう、大木は藤に生気を吸い取られている。そして若い青紅葉 あおもみじが一面に咲いていた。写真では無駄な情報が多すぎる。私が意識しているところだけ写すなんて都合のいいことはできない。墨で山水画にしようとするが、頭の中だけで手が動かない。頭の中の絵は私の独り占めである。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019 年
7 月号
No.673

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





午前9時半には皆さん立て終えるほどの手早さ。おにぎりとお汁をご馳走さまでした！

流枝会りゅうしかいの河骨こうぼね 仙溪
倉敷の上野淳泉先生宅での「流枝会」に健一郎が初参加して、河骨の立花を習ってきた。実は私が流枝会で初めて教えて頂いたのも河骨だった。35年前のテキスト253号にその時の様子を写している。
今回、私も一緒に上野先生の指導を受けることができた。私達2人にとって、大切な一日になった。



ギガンチウム

△2頁の花▽ 仙溪

花材 アリウム・ギガンチウム(百

合科)

グロリオサ(百合科)

アルストロメリア(・科)

花器 ガラス花瓶(スウェーデン

赤と白で紫の鮮やかさが増した。



ヘリコニア

△3頁の花▽ 櫻子

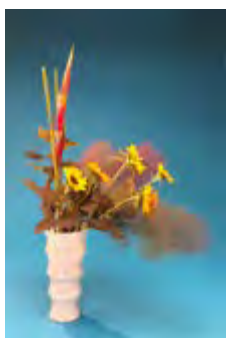
花材 ヘリコニア(芭蕉科)

向日葵(菊科)

スモークツリー(漆科)

花器 ガラス花瓶(フィンランド)

ヘリコニアの名前はギリシア神話の芸術と学問の女神ムーサが住む「ヘリコン山」に因む。





檜扇の生花

仙溪

花型 生花 行型
 花材 檜扇(菖蒲科)
 花器 練込陶水盤

「古語拾遺」の中に、ヒオウギの古名「烏扇」が出てくる。昔、神代に大地主神が田をつくる際に、御歳神の怒りによって苗葉が枯れてしまった。その祟りを去らせる方法の一つに「烏扇を以て扇げ」と告げられ、そのとおりにして苗葉は茂り、年穀も豊かに実った、という内容だ。風をおこせる姿形と、花のあとにできる漆黒の実(射干玉)に神秘の力を感じていたのだろう。

おそらく貴族が厄除け魔除けのために、烏扇に似せて作ったものを身につけていようとしたのが檜の板で作った檜扇なのだと思う。

だとするとこの花があつたから扇子や扇が生まれたとも言える。京都の祇園祭には昔からヒオウギをいける習わしがあるのも、疫病退散の願いが込められているのだと納得がゆく。平安を願ってヒオウギの生花をいけた。





杜若と河骨の立花

表紙の花 健一郎

花型 立花 杜若 一色 除真

花材 杜若 (菖蒲科)

河骨 (睡蓮科)

花器 陶花器

先月のお生花に続き今回は杜若の立花を立てた。まだまだ拙い立花だが、自分の力は出し切れているのでそんなに悲観的でもない。むしろ満足しているとも言えるだろう。ここ最近大切だと思っていることが一つある。花との思い出だ。数ある花と自分だけの思い出を作っていく。今回の杜若は、大田神社に行き写真を撮ってその後5月末までスマートフォン待ち受け画面にした(右の写真)。

河骨は岡山の池で朝早くから採取する所を見学させてもらった後、岡山先生と立花を立てた。蓮根農家



斜め横から見た奥行き

二足の草鞋

健一郎

今年の5月からもう一足草鞋を履くことにした。一足目はいけばなの先生。二足目は介護の職員だ。融通のきく非常勤で雇ってもらっている。一足目をより追求するための二足目の草鞋だ。

花と向き合う時によく考えてしまうテーマが2つある。「美」と「命」だ。

お花と向き合った時に感じる感情のうちの一つである「美しい」という言葉。美しいってなんだろう。よく考えてみるとこの言葉のあやふやさに気づく。綺麗なだけでは美しいと言えない。可愛らしいだけでも美しいではない。漲る生命感(みなぎ)だけでもない。様々な感情が幾重にも重なり合って生まれてくる感情ではないだろうか。花の美しさを存分に引き出せる華道家になりたいと考えている私は、美しいとは何かという疑問にぶつかった。

そもそも考えられるほどに美を知っているのだろうか。とりあえず美と身体で向き合ってみることにした。まず初めに美しいとされているものを片っ端から体感する事にした。オペラのコンサートに行ったり建築物、絵画など沢山の洗練された綺麗なものの身に着いたことがある。各分野の

洗練された作品は、ある一定のレベルを超えたものは素人目に見ても素晴らしいものである。そして、自然と向き合ってきたものであることが多い。全てのものは元を辿るとほとんど全てが自然の物に帰着する。陶芸でもそうだ。土、水、火と真剣に向き合った方の作品には他には無い凄みを感じる。人為的な作為が見え透いた作品はどこか凄みに欠ける。作品に飽きの来ない豊かな興行が必要なのである。それは人的な作為が見え透いた作品よりもより、自然らしい作品の方が飽きの来ない豊かな興行を持っているのではないだろうか。

幼い頃より綺麗なものに囲まれて育った私は自分の美的感覚を持つてはいるが、汚い物への耐性は皆無だ。副家元曰く、食事中に一言でも汚い言葉を誰かが発してしまうだけで食欲が失ってしまう子供だったらしい。でも介護の現場ではそんなことは言ってもらえない。ご家族が諸事情で世話できなくなった高齢者の生活の手助けをするのだが、今までの人生の中で一番人間というものに向き合えている。綺麗なものを育てながら美的感性だけでは厚みが無く、美しいと感じている。美を大きく捉えることができる。

2つ目のテーマが「命」である。

高齢の方を対象としているだけあって命と向き合う時間が多い。幼い頃から死については祖父と議論をしていた事もあり好きな時間でもある。だが何度考えても死が謎だという事が分かるだけだ。生け花をしていると幾度となく命と向き合わせられる。命という物が少しでも分かれば自分の作品に大きな影響が与えられるような気がしてならない。どこか根源的な美しさが引き出せるかもしれないと睨んでいる。

「美」と「命」の観点から介護職の魅力について話してきたが、介護職の魅力はこれで収まりきらない。介護職員の方達の人柄の良さも魅力の一つだ。介護業界の人達のホスピタリティあふれる行動と笑顔にはいつも驚かされる。相手に対する気遣い、配慮、全てが高い次元でなされており、息を吐くように人を承認する。そして、尊老の方と接する機会が多いことも魅力だ。長い人生を歩んでこられた方達の幾度とない忘却にさらされ、風化されたアイデンティティから学ぶべきものは少なくないはずだ。これだけ書いてもまだまだ書ききれないほど楽しい職ではある。

どういう風の吹き回しか、弟の順之助も介護の職につくらしい。家の大人3人は認知症になったら手厚いケアをしてもらえると喜んでいる。

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

寒菊

祝言。水際。

霜見草。秋無草。残り草。

藏玉集

幾代へし松の木陰の霜見草うへけるととき
をたれも知らねは

水仙一色の前置に必ず用いる。口伝。

われもこう

祝言。上中。

かるかや

祝言。上中。

この二草を通用に遣うは誤なり。

おほなこか草かる岡のかるかやはしたお
れにけりしとるもとろに

このふた草は、花も咲かず冬もなければ、た
おやかに幽美にして名高き草なれば、木にあ
しらひ、草にまぜてつやとなり、色と成りて
景気面白き草なり。指す人よくよく心を付く
べし。

第五十七図

立花 松除真

圓音

松菊 小菊 梅擬 晒木 柘植

柏 熊笹 嫩



圓音

粟

祝言。上中。

食物は立花に嫌うといえど、粟はやさしき物にして古来草花立てなどに用いる。常の花にはさのみ好むべからず。

古歌

ちはやふる神のやしろのなかりせは春日
の野へに粟まかましを

駒つなぎ

祝言。水際。

異名、狼牙。ろうが

沢ききよう

祝言。水際。

かよふの出生ひくく横へばかりはゆる物は、水際によこへばかり長く出しても苦しくらず。

花材解説もあと少しとなったので、掲載できていない立花図を紹介していく。第五十七図はおもに松と菊と柏で構成されているが、特に控枝の松の太さが目を引く。

第八十九図は「立花時勢粧・下 秘曲の図」の内の「松の前置」の立花図である。葉の短い、いわゆる良く締まった松を水際だけに使い、中段から上は檜の世界となっている。松の後ろに広がる幽玄の世界という趣である。ここでも控枝（定位置とは逆側）がいい味を出している。立花時勢粧の立花図には、控枝に重点を置いたものが少なからずある。作者の意図を想像するのが楽しい。

第八十九図

立花 檜除真

（松の前置） 富春軒

檜 晒木 沢水木 水仙 松 苔

枇杷 檉木



京都美風

新しき次代 いけばな展
第4期 (写真③)

会期 5月18日(出)〜24日(金)

会場 京都駅ビル2階広場

出品 桑原仙溪

花材 オクロレウカ (菖蒲科)

アンスリウム (里芋科)

ジャングルプッシュ (里芋科)

花器 陶大水盤 (ザールバーク作)

新元号を祝し、京都駅でのイベントに花を添えさせてもらった。



日本ポーランド国交樹立100周年記念現代美術展

オープニングセレモニー

会期 5月18日(出)

会場 二条城二の丸御殿唐門前

挿花 桑原仙溪

花材 大手毬 (忍冬科)

グロリオサ (百合科)

花器 陶花瓶 (竹内眞三郎作)

日本とポーランドは国旗の色が同じだ。赤と白の花に両国の友好と祝賀をこめた。(写真④)





水生植物

仙溪

花材 太蘭（蚊帳吊草科）

糸芭蕉（芭蕉科）

アランセラ（蘭科）

花器 陶水盤

豊を編む材料となるイグサ科のイグサ（蘭草）も、そのイグサに似るカヤツリグサ科のフトイ（太蘭）も水生植物である。

水中や水辺に生える水生植物は、その生育環境により5つに分類されている。

湿地植物…ミズバショウ、イグサ、サワギキョウ、サギソウなど。

抽水植物…アシ、ガマ、ハス、フトイ、カキツバタ、ミズアオイなど。

浮葉植物…スイレン、アサザ、ヒシなど。

浮遊植物…ホテイアオイ、ウキクサなど。

沈水植物…バイカモ、クロモ、セキショウモなど。

イグサ以外にもフトイやガマは編んで筵や敷物に、アシは簾に利用されてきた。ハスの蓮根やヒシの実には食用に。水生植物と人との関わりは多岐にわたる。





ホワイトレースフラワー

仙溪

花材 ニューサイラン(竜舌蘭科)

薔薇(薔薇科)

レースフラワー(芹科)

花器 陶コンポート

ホワイトレースフラワーは地中海沿岸原産の初夏の花だ。日本のセリ科植物とよく似ている。夏のいけばなのアクセントに。



乞巧奠とカジノキ

キイチゴの名前で出回っている植物は正確にはカジイチゴという名前である。バラ科キイチゴ属の落葉低木でおもに西日本に分布し温暖な氣候を好む。白い花が咲いたあとにできるオレンジ色の実は食べられる。

漢字では「梔苺」または「構苺」と書くが、クワ科のカジノキに葉が似ているのでこの名がつけられた。

カジノキは古代から神木として尊ばれ、神事の供え物の敷物に使われた。樹皮はコウゾと同様に製紙原料となる。

中国の「乞巧奠」という行事が奈



良時代に日本に伝わった。牽牛・織女けんぎゅう・しよくじよの二星が天の川を渡つて逢う陰暦7月7日に、手芸・裁縫などの技巧上達を祈る。この時、カジノキの葉に願いを書いて、七夕飾りの短冊として使われた。

木苺きいちごと薔薇ばら

△11頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 木苺「構苺」(かいちご) (薔薇科)

薔薇 (薔薇科)

花器 小判型陶水盤

近年、カジイチゴの栽培が増えてきたように感じる。枝を選べば生花にできるし、夏の暑さにも強いのが有難い。

レモン日より

猫目線で撮影中の健一郎。





パイナップル

桜子

花材 ミニパイナップル（パイ

ナップル科）

グラジオラス（菖蒲科）

アロカシア（里芋科）

花器 ガラス鉢

パイナップルにはプロメラインというタンパク質分解酵素が含まれていて、食後に食べると消化を助けてくれる。また、まるごと買った時に残った芯は、刻んで肉と漬け込むと固いステーキが柔らかくなってくれるので役立っている。

そんなパイナップルへの親しみを込めて、優しいピンク色のグラジオラスと、個性的なアロカシアの葉をとり合わせ、青いガラスの器にいった。見ていると元気をもらえる、そんな盛花。アロカシアの茎は見た目より弱いので、太めの針金を添わせて茶色のフローラルテープで巻いておく。場合によっては葉裏にも針金を這わせておくといい。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019 年
8 月号
No.674

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



いけばなインターナショナル 京都チャプター例会

会期 6月18日(火)

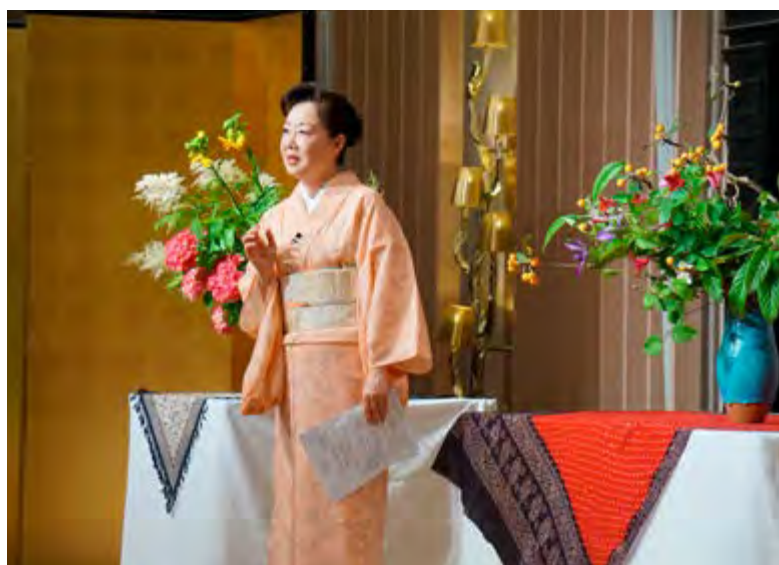
会場 京都プライトンホテル

講師 桑原 櫻子

助手 桑原健一郎 滝本慶由

二井慶博 島慶和

「初夏の出会い花に想いをよせて
万葉集の花をいける」



新しい時代、令和が幕を開けました。奈良時代に完成した日本に現存する最古の歌集「万葉集」を典拠とする元号は初めてです。万葉の花を詠んだ美しい歌を、花と共にご覧いただきました。 櫻子

キキヨウ

朝顔は 朝露おひて 咲くといへど
夕かげにこそ 咲きまさりけれ

朝顔（おそらく桔梗のこと）は朝露を受けて咲くというけれども、夕方の光の中でこそ、なおよそその美しさが際立つものなのです。

写真② 七竈 桔梗 撫子
陶花器（幾左田昌宏作）

アジサイ

紫陽花の 八重咲くごとく 弥つ

代にを いませわが背子 見つ
偲はむ 橘諸兄

アジサイの花が幾重にも重なって美しく咲いているこの佳き日。あなた様にはこれからも末永くお元気でご繁栄されますようにお祈りしています。これからもアジサイを見る度にあなたを想っています。

写真③ 珍至梅 紫陽花
竹島百合

手付大籠（公長斎小菅）

ハス

ひさかたの 雨も降らぬか 蓮葉に溜まれる水の 玉に似たる見む
雨が降らないかしら、ハスの葉に溜まった水が玉のようにきら

めくのを見たいなあ

写真④ 蓮はす 縞しま草くさ

ガラス花器

ユリ

道の辺の 草深百合の 花笑みに
笑みしからに 妻と言ふべしや
道端の草の茂みのユリのように
微笑んだだけに、(あなたは私の事を) 妻だと言うので
しょうか、そうではないですね。

写真⑤ 横縞太蘭よこしまだん 笹百合ささゆり

下野しもがね 半夏生はんげしょう (半化粧)

青白磁蛙耳花器 (伊東陶山作)

イヌビワ (ちち)

ちちの実の 父の命 ははそ葉の
母の命 おぼろかに 心尽くして
思ふらむ その子なれやも ますら
をや 空しくあるべき……

父母が心を尽くして思っておられるような、そんな子供であるのだろうか、武勇で後の世に語りつがれるようにならないければ

写真⑥ 枇杷びわ (犬枇杷いぬびわとは別の木) 鉄線数種

陶花瓶 (加藤敏雄作)

ハギ

我が衣 摺れるにはあらず 高松の



野辺行きしかば萩の
摺れるぞ

私の衣はわざわざ染めたのではありません。高松の野辺(ハギの名所)を行くうちにハギの花の色に染まったのです。

写真① 無双萩むそうはぎの着物を着て歌の世界を花と話でお伝えしました。

和歌に詠まれた花の世界を、女性の視点でドラマチックに紹介。万葉人に親しみを感じる楽しいデモンストラクションだった。仙溪





粉青沙器にける

△ 4 頁の花 ▽ 仙溪

花材 矢筈薄（稲科）

山紫陽花（紫陽花科）

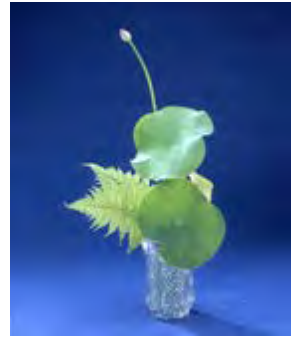
花器 粉青沙器（崔龍熙作）

親の親の親がどんな人物だったのか、そんなルーツを調べて教えてくれるテレビ番組がある。ご先祖様の生きざまを知り、もっとも大切な事に改めて気付くのだ。

アートの世界でも自分のルーツとどのように関わるかは大きな問題だ。崔龍熙さんは京都の近藤高弘氏のもとで修行した後、今は自身のルーツである韓国の粉青沙器を研究されている。粉青沙器は李氏朝鮮時代前半に生まれた焼き物で、のちに白磁が作られたすと姿を消すが、日本では「三島」「刷毛目」「粉引」などと呼ばれて珍重され現在に至っている。崔さんは本来の制作技法にこだわることで、韓国の焼き物のルーツを辿り始めた。

彼の作品に季節の花をいけてみた。拙いけれど素朴で初々しい花になった。





ハス

△表紙の花▽ 健一郎

花材 蓮^{すず}(蓮科)

羊歯^{ひだ}(羊歯類)

花器 ガラス花器

共感覚^{きょうかんかく}：ある刺激に対して通常の感覚だけでなく異なる種類の感覚をも生じさせる一部の人の見られる特殊な知覚現象である。

こう言った特殊能力には憧^{あこが}れる。

音を聞き形を思い浮かべたり、文字に色を感じたりといった言わば特殊な能力である。人にもよるがこの共感覚にはある程度の規則性があるので、いくつか答えを聞いているとなんとなくではあるが予想できるのである。予想が外れた後の回答と解説は、同じ感覚を有していない私からすると不気味な説得力があるのだ。細工ものを作るときに頼っている手先が器用な知り合いが書いた絵を見て欲しい。私の生けた作品がこう見えて仕方がないらしい。もちろん私がハスに抱く思いなんて関係がな



い。いけばながエイリアンみたく見える共感覚はさほど羨^{うらや}ましくないが、いけばなの解釈の広さと共に可能性を感じた。



横から見た奥行き

11人の僕

健一郎

小学生の頃、人より少しサッカーが得意だった私はチームメイトに対して腹を立てていた。僕が11人いたら勝てるのに。そんな時、母は私に言った。「あんたはよその子と違うし、よその子もあんたとは違うやろ？」一年に二、三回はふと思いついて出てくる言葉だ。その後も表現を変えて何回も言われることになる。「世界中あんたしかいいひんかったら牛が絶滅してしまうわ!」「あん

たみたいになかましいのが2人になることすら想像したくないわ。」散々言われようだ。

中学校を卒業する頃になってやっと言葉の意味がわかった。高校の進学の時である。

小学校の頃から勉強は得意ではなく、私の通知表を見た母も、体育の成績以外は特に触れないでいてくれた。むしろ体育の成績ばかり認めてもらえるので運動が好きなのも相まって益々精が出た。そんな運動バカは算数や国語などの悪い成績は気にしておらず、いつも成績表を誇らしげに見せていた。高校の進学のタイミングで意識した通知表。初めて自分に短所があることに気がついた。

自分の短所を認識できるようにすると自分の中で、「あんたはよその子と違うし、よその子もあんたとは違うやろ?」という言葉が腑^{はら}に落ちた。するとなぜか、人の見え方が一気に変わった。障がい者の人を見かけても、可哀想だと思わなくなったのだ。「障害者の方たちは私たちとは違って普通に行えることが出来ないから助けてあげなさい。」そのように小学校では習った記憶がある。だが私は障がいのある人を見かけても、特別な感情をもたなくなってしまう。というよりは過剰な意識をしなくなったとも言えるかもしれない。電車で他の人に席をゆずる事と

の違いがよく分からないのだ。皆んなが意識するほど大きな差があるようににはとても見えなくなった。

現在、認知症の人しか入れない施設で介護の職に従事している。それが楽しくて仕方がない。「お兄ちゃん楽しそうやね」「お兄ちゃん幸せそうやね」利用者の人は会う度に新鮮な目で評価を下さる。

認知症の人は、よく物を忘れてしまう。主に短期記憶がおぼつかない。ついさっきお昼ご飯を食べたのに、まだ食べてないとクレームを受けることにも、もう慣れた。お昼ご飯を食べていないと言っている人に「さっき食べてたでしょ?」なんて言うものなら大変なことになる。「お腹が空いていますか」と尋ねる方がよっぽどスムーズに話の折り合いがつく。前者と後者の違いは何か。前者は認知症の人が感じていることではなく、事実にも目を向けている。後者は事実ではなく認知症の人が感じていることを受け入れ、共有の事実として話を進めているのだ。

認知症の症状がない人との会話でも、話が平行線のまま交わることがない光景をよく目にする。自分が話したい事を話している人にその傾向がある。相手が話して欲しいことを感じ取りながら話す事が、会話の基本だと今のところ考えている。ただ単に気を遣って遠慮しながら話す言

葉は、結局は自分の事しか考えていず、相手に迷惑をかける。なので簡単そうで難しい事ではあるが相手に気持ちに向けて話す鍛錬にはもってこいだ。

人はその場にあつた適応行動をする。先ほどの昼食の例で考えると、お昼ご飯を食べていないからお昼ご飯の要求をするのだ。何も不思議なことではない。これも認知症の人だけに当てはまる問題ではないと思う。症状がない人の場合も、勘違いや思い込みが入り混じって会話をすることがよくある。言葉の定義があやふやな場合もあるし、物事の認識の差異から生じる場合もある。とはいっても、認知症の症状が進んでいる人はその誤差の程度は確かに大きい。だが、誰しもが思い込みや、勘違いの中で生きている。もし、この思い込みや勘違いの中で生きていない人がいれば、それが勘違いである。人間としての本質は同じである。私はよその子と違うし、よその子は私とは違うのである。



今年の祇園祭後祭の巡行で浄妙山園改^{くじやうた}めを健一郎がさせていただいた

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

犬子草えのこ

祝言。水際。

古歌

えのこ草おのかころほに出て秋置露
の玉やとるらん

濱木綿はまゆう

祝言。水際。

蘭らん

祝言。前置の上まで。

和名集、水香。本草、沢蘭さわらん。

藤ばかま

祝言。中段。

通用にあらず、横へ出す。



第二十八図

立花 梅除真

除真の内草の花形 中塚半之丞

苔 梅 嫩 松 蘇鉄 椿 柘植

水仙

蘇鉄が請、胴、控枝に使われた珍しい立花。紅梅、水仙、白椿が色を添え、真に苔木（梅）を大きく使うことで、蘇鉄の存在を生き生きと際立たせている。

正心の真後ろに立ち昇る傘松も珍しい見越の立て方で、それによって蘇鉄の葉の働きが強調されている。

古歌

朝またき誰きてみよとふちばかま玉ぬく

露のさかりしつらん

鼠尾草
みそはぎ

非祝言。水際より控枝まであがる。

宿魂草。
しゆくこんそう

古歌

誰もたけふや折らん年毎に水かけ草の

露のまにまに

龍膽
りんどう

非祝言。水際。

一説通用、一説に通用にあらず。

本草綱目にいう、龍葵の如し、味苦くして

胆^{たん}の如し、因んで名となす。俗に草龍膽と呼

ぶ。又云う山龍膽あり、葉霜雪に枯れず。

和名、くだに。おもひ草。

龍膽、熊笹に取り合いよし。前置の時かな

らず用いる。

よろいとおし

第五十九図

立花 やつで除真

西村松庵

やつで 松 菊 柘植 熊笹 嫩

著我 狗子柳 銀杏

ヤツデが真と胴に使われている。他の役枝がヤツデの大きな葉の広がりと同化してしまわないように、異形の松と菊で副、請をつくり、控枝の玉形の柘植でぎゅっと全体を引き締めている。



同松庵

非祝言。水際、控枝によし。

白芷。
よろいとおし

唐車前
どうおぼこ

祝言。水際、前置にも用いる。

茉莉。
なほけり（詩経）。

あわ雪

非祝言。水際より前置の上まで上る。

花づる

祝言。上中、心にならず。

この花近代出て立花の賞翫となれり。請副、つや、あしらいもつとも美なり。これ烏かぶとの変じたるものか。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三卷 立華時勢粧』（日本華道社刊）

『花道古書集成 第一期第二卷』（大日本華道界刊 思文閣出版刊）

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』（思文閣出版刊）

第七十図

立花 芭蕉直真
桑原半兵衛
芭蕉 菊 小菊 松 梅擬 柘植 椿
檜 苔 夏はぜ 著我

芭蕉（糸芭蕉？）の葉が真に5枚、あしらいに1枚使われている。上半分を芭蕉と菊の2種でまとめ、下半分を松や梅擬などでしっかりと作り込んでいる。上下で景色をがらりと変えているところに、芭蕉への特別な思いを感じる。かなり大型の立花と思われる。





京都いけばなプレゼンター
シヨン2019
やっぱりすごいゾ！いけばな
小品いけばな展

会期 6月7日(金)～10日(月)
会場 京都芸術センター

桑原仙溪 (写真①)

花材 おとめゆり
乙女百合
紅葉唐松
もみじからまつ

白花 薔
びんかつ

満天星の枯枝

花器 ガラスの鳥(フインラン)

ド製

ミニガラス花器(鈴木玄
太作)

ガラスの鳥に小さな器を背負わ
せると置物が花器になる。物語
を想像してもらえれば。

桑原健一郎 (写真②)

花材 山法師
煙の木

切り紙細工の蝶

花器 陶花器(近藤豊作)

遊び心を感じるいけばな。身
近で、かつ洗練された細工を加
えることで、いけばなの情景が
より楽しいものになっている。



姫蒲の盛花

△10頁の花▽ 健一郎

花材

姫蒲（蒲科）

鶏頭（寛科）

擬宝珠（百合科）

花器

ガラス鉢

私の家では調子にのつていと必ず釘を刺される。釘にもかなりの数があるのだがその中に『因幡の白うさぎ』のうさぎにならんときゃ」というものがある。調子にのつて相手の寛大さにつけ込んでいとワニに体の皮膚をズル剥けにされるらしい。

古事記にのつていだけあつて説得力は抜群だ。時間と忘却の風化にさらされ洗練されたモノの価値は、時代を追うごとに増していくばかりだ。



丸葉の木の生花

△11頁の花▽ 健一郎

花型

生花二種挿し 副流し

花材

丸葉の木（満作科）

穂咲下野（薔薇科）



花器 竹筒

「この辺も変わったなあ。外国人ばかりで日本やないみたいやわ。昔は良かったのに。」京都に住んでいるとお天気の話と同じくらい、あたりさわりが無く、会話のきつかけとしても使われる常套句だ。確かに過去はいいものだったと思う。その過去にもまた同じことを言っていたのではないだろうか。そしてその過去もきつと過去を懐かしんで羨ましがったに違いない。今の累積が過去になる。いつだって今が一番いいのではないだろうか。とは言っても時代の波にのみ込まれることなく残って欲しいものもある。



レモンだより

健一郎先生が立てた檜扇の立花の前で、お床を拝見するレモンちゃん。





ガラス器にいける

△12頁の花▽ 仙溪

花材 トルコ桔梗（竜胆科）
ふいりいたどり

斑入虎杖（蓼科）

花器 ガラス花瓶（ヨーラン作）

フィリタドリの葉が涼しげだったので鉢植で求め、一重のトルコキキョウと2種でいけた。流水を形に留めたような器はスウェーデンのガラス作家によるもので、器の中に花の茎を極力見せないようにいけている。器の個性が生きたいけばなを目指したい。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019 年
9 月号
No.675

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





十三世の花器

△2頁の花▽ 仙溪

花材 アンズリウムの葉(里芋科)

ベニキ 紅の実(紅の木科)

オンシジウム(蘭科)

花器 陶花器

先々代が買い求めた花器の中では、かなり大きな部類の一つ。とても重いので花展に使うこともほとんどなかった。以前の「テキスト」に使われていないか調べてみたが、43年前に京都朝日会館で開催された13世家元の「桑原専溪個展」の一作として紹介されている(左頁の写真)。藤蔓を器にからませてサボテン、熱帯の枯実を加え、口元にスターチスの枯花が挿されている。会場の中の異色ある作品だったと書かれている。今回はあまり気負わず初めての感触を味わった。ブロンズ色の葉が器の縞模様と調和している。ベニノキはメキシコ原産の常緑低木で、英名リップステイック・ツリー。実の中の赤い種子は食品の赤色染料(アナトール)や料理の味付け、口紅などに使われる。





風船唐綿の実

△3頁の花▽ 仙溪

花材

雪柳（舊薇科）

風船唐綿（夾竹桃科）

ガイモ科

トルコ桔梗（竜胆科）

花器

陶花器

フウセントウワタは南アフリカ原産の多年草で、白色の小花のあと突起のある袋状の実ができ、やがて実が割れると白いシルクのような毛の房をつけた種子が風にのって飛んで行く。キラキラと光る綿毛が無数に舞う光景が目につく。

切り花のフウセントウワタには少し葉が残っているものもあるが、繁みのあるものをとり合わせるのがい



テキスト 153 号（1976 年 3 月）より。





恐竜

△4頁の花▽ 健一郎

花材 グラプトペタルム（弁慶草科）
チランドシア（パイナップル科）
花器 ガラス容器

この作品は見て頂きますように「いけばな」となかなか言いづらい性質を持っている。水ではなく、土を見せているところ、多肉植物、エアープランツ、折り紙、恐竜…。小学生にも楽しんでもらえそうな作品ではあるが、最近自分が問題だと捉えている事の表現になっている。花、花器と向き合う時に自然と生まれた土への強い意識。その他にも思想の断片が作品から見てとれる。なぜ恐竜が土を向いている物があるのか。土の中の恐竜と土の上の恐竜の違い。なぜ折り紙なのか。なぜ多肉植物か。

他の芸術作品と違い、生け花は問いかけのある作品が少ない。実際に生け花作品と向き合った時に考えさせられるものはほんの一握りだ。それが退屈か退屈ではないかの話では無く、少ないというだけである。

花を使って問いかける作品を考えてもいいとは思いますが、花を扱う以上、慈愛の心が込められている事が何よりも大切である。

レモンだよ

2ページの花器の大きさが伝わるように協力してくれています。大きさが伝わるかには。



王様同士

△表紙の花▽ 櫻子

花材 キングプロテア（ヤマモガシ科）
葡萄（マスカット）（葡萄科）
花器 ガラス花器（ドイツ製）

8月初旬に岡山から葡萄をいただいた。飾りたくなるほど綺麗な葡萄だ。酷暑の中丹精こめて育てられた大変さを感じる。

8月半ばに山梨県のワイナリーへ見学に行ってきた。周りを山々に囲まれた丘の上に葡萄畑が広がっていた。標高が高く冷涼で日あたりにも恵まれているので、とても甘い葡萄が出来るそうだ。よく見る棚仕立ての他に品種によっては垣根仕立てもある。葡萄の木の足元には雑草が残っており、あえて自然の植物と競争させていた。

雨避けビニールの屋根が木の上に被せてあったり低い実の部分に掛けてあったりと、きめ細かに一つ一つの葡萄が守られていた。どの畑にどのような品種が適しているのかも考えられているようだ。

葡萄もワインも愛情を込めて作られていて、風土を生かした繊細な味わいに感動した。

今回は切りたてのキングプロテアと取り合わせた。どちらも王様！



最近の休日

健一郎

学校で毎日したいことばかりしている。今日が何曜日で何日だったか分からなくなる。明日する事も分らずに、毎日したいことばかりしている。

大雑把ではあるが、毎月自分なりに予定を立てる。お花のお稽古の日を決める。美しいものに触れる日を決める。仕事の日を決める。毎月自分のしたいことで埋まっているスケジュールを見ると□元が緩む。

自分の組んだスケジュールを誰がこのスケジュールを組んだんだと、文句を言いたくなるぐらいタイトなスケジュールの日もあれば、午前で用事が終わってしまう日もある。突然できた隙間時間には、決まって本屋に行く。2、3時間の時間なら、家から近くの大垣書店で徘徊する。家の近くに本屋があるのはすごく助かっている。椅子があつて長居ができる店舗もあり、晩御飯をこしらえてる副家元を待たすこともある。あの程度まとまった時間があるときは、岡崎のほうまで行く。バイクを使うとすぐに着く。岡崎の方に行くときには必ず周りのギャラリーの催しも確認してから行くようにしている。なかなか面白い企画にいつ行っても出会う。MORI YU GALLERYな

んかは、最近のお気に入りだ。

この間買い物で河原町のあたりに行った帰りにBALの丸善にいつて本を15冊ほど買ってきた。本を買う前に中古でその本が売られていないか探すのだが、最近欲しくなる本はなかなか売っていない。本を持って店内をうろついている自分をふと客観視すると、本を元の位置に戻す仕事を任された学校の図書委員さながらだ。いざ買おうとレジまで持っていくと「お持ち帰りですか？」と聞かれる。7冊と8冊で分けられたパランスの悪い布地の袋を左右に持ってゆっくりと帰る。いつの間にか夜になっていた。鴨川の河川敷を歩いて帰ると涼しい夜風とともに冷たい柳が揺れている。昼間は私を警戒していたサギも今は油断しているのだろうか。触れられそうな距離にいる。

本屋に行くたびに家に増え続ける本。この本全てが頭に入っているわけでももちろんない。知識を詰め込むことが目的ではない。そんなものはパソコンにでもやらせておけばいい。容量さえあればなんでも一字一句間違えずに記憶することが出来る。

必要なのは知識でなく、自由気ままに生きる為の知恵だ。

私は本を読むことで価値の選別を

行っている。大事なことはメモを取らなくても覚えているものだ。大事だから。覚えられなかったことは今の自分には必要のないものだ。

このように自分の脳を使って私がものを考える際に、大事だと思ふ情報の選別を行っている。無理に覚えようと思わないし、忘れないでおくべき情報がない。頭に残ったものだけが私にとって必要な情報なのである。無理に覚えようとしなくていいと思えると気楽に思える。



立花秘傳抄 三

草之部 (つつき)

犬子草えのこ

七重草

非祝言。水際。

葱草

同前。

さんき草

非祝言。水際。

矢筈

同前。

秋海棠

非祝言。水際。



第六十五図

立花 松真水際指分

菱屋六兵衛

松 晒木 梅 竹 柘植 椿 嫩 水仙
柏

二つ真のように水際から一直線に空間が空けられているが前置で左右が繋がっていることと、真はあくまでも一つである。この左右を合体させたならそのまま幽美な立花となる。夫婦仲睦まじく寄り添う姿に見えてくる。例えば金婚式のお祝いに立てるならこんな立花がいい。

いささ

祝言。下。

野かいどう

非祝言。下。

けまん

同前。

茜草

祝言。下。

莎草こうかし

祝言。下。

桜草

祝言。下。

虎尾

同前。

つち草

祝。上。



第八十八図

立花 二真

(初版には 二ツ真 眞春軒)

竹 松 梅 檜 嫩 水仙 椿 千両

伊吹 栢植 枇杷

水際指し分けとは全く違う世界感で立てられている。異なる二つの真を持ち、左右それぞれ別の景色が垂直の空間を隔てて作られ、しかも全体が調和している。何と言っても中央のあきがつくる強いなものに圧倒される。時空を越えて二つの世界が調和する不思議な立花だ。

金玉花

祝言。下。

にし木々

非祝言。下。

うつほ草

祝言。下。

山茨菰
やまほおづき

祝言。下。

ばれん

非祝言。中。

仏生花

同前。

岩芭蕉

非祝言。中。



第八十五図

立花 松合真

(初版には 合真 寛春軒)

松 梅 檜 柘植 椿 伊吹 熊笹

嫩 枇杷

真には相生真、合真、二つ真、直真、除真の五つあり、その一つ「合真」は二本の若松をぴったり合わせて真に立てた立花で、婚礼の席で立てられる。若松を新郎と新婦に見立てた特別な立て方。紅梅と白椿の紅白がハレの日にあふさわしい。器にも縁起のいい瓢箪が見える。



柴栗の実

△ 9 頁の花 ▽ 仙溪

花材

柴栗（櫟科）
竜胆（竜胆科）

スプレー菊（菊科）

花器 脚付方形陶水盤（伊藤典哲作）

栗と人との関わりは遙か縄文時代に遡る。青森県の三内丸山遺跡から出土した栗をDNA鑑定したところ、栽培を繰り返していたことがわかった。栗は良質なでんぷんに富み長期保存が可能。4～5千年の栽培の歴史があるわけだ。

立華時勢粧には立花の花材解説で「栗の若ばえ」を下段に使うと書かれている。おそらく新芽から若葉が出はじめる春に使ったのだろう。栗の芽吹きはいけたことがないが、江戸時代には身近に採集できるちよつと気の利いた花材だったのか。

今はもっぱら栗の毬を楽しむ花材として夏から初秋に出回る。青い毬は小さく可愛い。保ちは悪いが季節を感じられるので毎年いけるのを楽しみにしている。





石化金雀児

せつかえにしだ
 〆10頁の花〆 仙溪

花形 生花 草型 副流し

花材 石化金雀児（豆科）

花器 煤竹竹筒

「金雀児」「金雀枝」と書く日本が中国が原産のように思うが、エニシダは地中海沿岸原産の低木である。晩春に黄色の蝶型の小花が枝一面に咲くと、黄色い繁みがあちこちに現れる。古い学名の「ゲニスタ」が訛ってエニシダとなった。小低木という意味だそう。ちなみに英名はブルーム（ブルーム）で、この枝で箒をつくっていた。

枝が帯化した「セッカエニシダ」と呼ばれるのは白花品種のシロバナエニシダである。

エニシダの生花は細枝の付き方を要所所に生かす工夫が必要となる。櫛で解いたように線をそろえていけるには技術と根氣がいる。

セッカエニシダの場合、枝先の石化した姿を生かしておよその形をつくり、その間に細枝で厚みをつけてゆく。





菊の株分け生花

〈11頁の花〉 仙溪

花形 生花 株分け

花材 糸菊(菊科)

小菊(菊科)

花器 かいらぎ釉陶水盤

(木村盛伸作)

菊の季節の始まりである。

菊はもともと中国で生まれ、寒気に耐えて花開く姿から不老長寿をもたらす仙薬とされた。また文人に好まれ、高潔に生きる象徴として梅蘭、竹とともに四君子と呼んで尊んだ。

古く日本に渡った菊の品種が爆発的に増えるのは江戸時代の園芸ブームによる。元禄8年の「花壇地錦抄」には250種あまりの菊が紹介されている。京都の寺院で催された「丸山菊大会(享保2年)」では143人が参加し380種の菊が集まった。菊栽培の技を競い合っていたことがわかる。

多様な菊をいけて楽しむ文化を後の時代にも繋げてゆきたい。



空海

仙溪

先日テレビで空海が辿った中国の道を紹介する番組を見た。

空海は793年、讃岐国の郡司の家に生まれ、のち平城京へ上つて勉強。19歳からは大学での勉学に飽き足らず山林修行をはじめた。

804年、第18次遣唐使に学問僧として加わるが、空海を乗せた第4船は嵐のため目的地の遙か南の福建に漂着。福州で許可を得て閩江を船で遡り、陸路で仙霞古道を浙江省へ。富春江を下って杭州に辿り着き、ようやく本来のコースにもどったことになる。唐の都、長安に着いた空海はわずか2年で千人を超える中から密教の正当な継承者に選ばれ、帰国後には高野山で真言密教を開き、万民救済につくした。

番組では空海が体験したであろう多様な自然と文化を紹介していたが、その中で一際印象に残った風景が江郎山だ。高さ300mの2枚岩の隙間は垂直に天を突く。大自然に圧倒されると、人はなんとちっぽけなのかと思う。でも人は自然を糧にして豊かな文化を育むこともできるのだ。

私の中では江郎山の絶景と二つ真の立花が重なった。どちらも宇宙の神秘が感じられる。





センダンの実

△12頁の花▽ 仙溪

花材 柗せんだん（柗科）

薔薇ばら（薔薇科）

ガーベラ（菊科）

花器 陶花器

鴨川の御池大橋東詰にセンダンの木がある。5～6月に薄紫色の花が集まって咲いているが、高木なので気付く人は少ない。花のバニラに似た芳香も風で飛ばされて下を歩く人には届かないようだ。

そんなセンダンも秋から冬にクリーム色の実が鈴なりにぶらさがり姿は人目を引く。その実を見てはじめてセンダンがそこにあったことに気付く。

センダンは古名をアフチ、オフチと呼び、万葉集の歌からはこの実の種子で髪飾りをつくったことがわかる。

まだ青い実を器から簪かんざしのように出し、赤とピンクの花で華やぎを加えた。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019 年
10 月号
No.676

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





秋色を楽しむ

△2頁の花▽ 仙溪

花材 丸葉の木まるはのき (満作科)
鶏頭けいとう (寛科)

花器 陶花器 (竹内眞三郎作)

秋色の大きなケイトウ。丈夫な茎を長く生かして立ち姿を見せれば風格が感じられる。あるいは立てずに思い切つて短く前へ倒すことで花色を際立たせる生け方も面白い。

微妙に色の違うケイトウの赤色に、紅葉したマルバノキの葉色を重ねて秋色を楽しんだ。ススキの穂で季節感を深めている。

マルバノキは別名をベニマンサクと言ひ、晩秋に紐状の赤い五弁花を背中合わせに咲かせる。夏の緑の葉も清々しいが、カラフルな色彩に染まる秋はとりわけ美しい。鮮やかな自然の贈りものを存分に楽しませてもらった。

横から見た奥行き





へんてこなハロウィン 健一郎

花材 野茨（薔薇科） 木苺（薔薇科）

スプレー菊（菊科）

花器 ガラスコンポート

ハロウィンで花あそびをしようとしたが花を生ける時自然にある姿を生けようとするため、普段から慣れ親しんでいる自分にとって身近な和花を選んでしまう。可愛らしいガイコツとコウモリは手先の器用な知り合いにこさえてもらった。和風ハロウィンの花あそびになった。



籠にいける

〈表紙の花〉 仙溪

花材 雪柳（薔薇科）

吾亦紅（薔薇科）

鶏頭（苧科）

竜胆（竜胆科）

女郎花（女郎花科）

桔梗（桔梗科）

花器 煤竹肩付籠

籠にいけるときは軽やかにいけて籠の軽さと調和するように気をつけたい。

重みのある花や太い枝ものは避けること。

素朴な風合いの籠には、野山から摘み取ってきたような風情の花。微風を感じるような枝を選ぶといい。作例の籠は籠にしてはどっしりとしている。雪柳を低く前へ出して器の量感に見合う膨らみを作り、五種の秋草を一本ずつ加えている。雪柳の繊細な下がり枝で籠の強さが和らぎ、少ない本数でも器との視覚的なバランスがとれた。





木賊と秋海棠 しゅうかいどう

△ 4 頁の花 ∨ 仙溪

花形 生花 二種挿し

花材 木賊 砥草 (木賊科)

秋海棠 (秋海棠科)

花器 かいらぎ釉水盤 (木村盛伸作)

トクサとシユウカイドウは相性がいいように思う。共に湿気を好むところも似ている。トクサに細い分かれ枝がついている場合、生花に比べると取り除いたほうがいい。

横から見た奥行き



レモンだより

朱塗りの円卓の下が好き。



東北一人旅

健一郎

釜^{かま}の温度を冷ますのに、四日間の自由時間が私に与えられた。宮城県^{みやぎけん}の山奥で、急にできた暇は、私を自然に東北への旅に誘った。東北はその県も魅力的だが、宮城、岩手、青森の三県に絞って観光をした。

「東北」と一纏^{ひとまと}めにして話す自分を見ると解像度の荒さが目立つが、初々しくてそれもいいと思う。東北に着くなり、私は自然の強さに圧倒された。東北に来る前に実際の自然（私の目的は苔）を見るべく家族で富士の樹海を見に行った。それはそれで圧巻だったわけだが、東北の自然は何かが違う。生命力に満ち溢れているのだ。人が少ないからだろうか。今までに見てきた自然とは明らかに異なり、そこに強い魅力を感じた。京都に住んでいると、東北に行くよりも北海道の方が近くに感じるほどに東北は遠い。なので、なかなか行く話が出ない。何を軸に生きているかにもよるが、その人の思考と感性において絶大な影響を及ぼすに違いない。少なくとも私の思考と感性を研ぎ澄まさせた。八甲田山、十和田湖、奥入瀬溪流。観光化されており人であつた返しているのに、それを感じさせなかった。人の介入が最小限なのだろうか。朝方に大雨が

降っていたからだろうか。神秘とも言える光景が目の前を覆った。

今から、「やってみなさい。」と言われると受け入れきれないが、縄文人の生活スタイルはなかなか豊かなものだったと思う。人間が自然と共に生し、自然を崇め、感謝し、生活の中にも美を求めた。三内丸山遺跡^{さんないまるやま}の土偶、縄文土器からは美の意識が見てとれた。とても無い事だと思つた。食料の貯蔵も今ほど容易ではなかっただろうに。縄文人の先祖への畏敬の念は想像できても、生活の中に美を求める意識は俄かには信じ難い。縄文人の美に対する意識には畏れ入る。

V・オフチンニコフ著『日本人とはなにか』に、「日本人が宗教に対して希薄なのは美しいものに對する崇拜があるからだ」と述べられている。美に対する日本人の愛情は自然に對する愛情に根ざしているという。自分の国の自然を神として崇めているのも関係しているのだろうか。ロシア人に日本のことを教わるという、少し変わった本だが、日本の美意識について書かれたなかなか面白い本である。私は東北の旅を経て、自然と向き合う事は、美の起源と向き合う事であり、神を学ぶ事は古^{いにしえ}の先祖の解釈した自然を知ることだという解釈に至った。京都の市内

に住んでいると手の加えられすぎた人工物で溢れている。一部の人はそのことに嘆いている。それが故に人は人間自身が自然の一部だということ、忘れてしまっている気がしてならない。自然の中の人間が地球にある物質だけで高層ビル群をも創造した。傍観者ではなく、内部観察者としての自分を見つめ直してみることも大切なことかもしれない。



新しいピアス 健一郎

介護職につき思いもしていなかった能力がついてきていることに気づいた。気づく力だ。それも、意識していなかった事に気づく力だ。「アハ体験※」のようなものである。この能力を磨くと日々同じ利用者をつぶさに観察する事で、すぐに異変に気づき対応することが出来るのだ。この観察力は日常生活でも充分に生かすことが出来る。花と向き合っている時に今まで意識していなかった部分に目がいつたり、毎日歩く同じ道が歩いて楽しくなつたりする。家族に時々気付いたことを言ってみたりもする。「お母さんのそのピアス新しく買ったやろ！」と自信満々に聞くが、「もう10年前から持つてるわ！」時々外れる事もある。でも10年間意識していなかった母親の耳に目がいつているので、まあ、よしとし、めげてはいない。

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む

⑥2

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

水仙花

祝言。上中下。

本草綱目に云う、この物卑湿ひしつのところによろし。水欠くべからず故に水仙と名づく。

異名、雪中花、玉玲瓏ぎょくれいろう。一重なるを金盞銀台花だいかと云う。千葉なるを真水仙と云う。

水仙は五二色いっしきのその一つなり。一色のみにかぎらず、常の立花にも一に水仙、二におもとと云い伝えて、最上の秘事なり。又水仙の座として瓶の中にさす所と指さぬ所とあり。葉遣い秘伝数多あまたあり。

水仙を正心に用い、あるいは中に遣うとも、葉は水際までさげて遣うべし。

水仙の一色、早咲きの時分ならば枯葉を立

つべからず。仲秋のころよりは二、三枚遣うべし。春になりては三、五枚にても苦しからず。祝言の花ならば枯葉遣うべからず。

水仙の葉、水際に長く遣う時は、葉のあつき勢いあるを竹をほそくけつり、なかば指し通して、二枚取り合わせ、葉先すこしちがえて、

第百六図

立花 水仙一色

水仙一色真 富春軒

水仙 金盞花 蒼莪



一度にためて遣うなり。針金を用いるべからず。

このごろの人の水仙を遣うを見るに、針金を指し通して葉先をまげ、あるいは小刀のむねをもつて、しごきて勢いあらせるを専らと好む。これ大いに出生の道理に背く。見ずや水仙の葉の幽美なることを。師の云う、水仙の葉つよくなづる時は、生得のつやうせて、自然の景気なしと云えり。誠に名人の教えありがたき事にこそ。

立花秘傳抄の三終

f f れている。「常の立花にも、一に水仙、二に万年青と云い伝えて最上の秘事なり」と書かれている。「水仙一色」の図が三つある。直真立花、株分砂物のそれぞれに自由奔放な水仙の姿が描かれている。これらは葉に針金を通して形作つたものではなく、すべて元々の姿であり、自然に曲がりくねった水仙を集め、役枝に配することで絶妙な花形を生み出している。

一本ごとの水仙を見ると、行儀の悪い扱いがたい姿をしている。でもそういう姿こそ、雪に倒れ風に

翻弄されても葉を伸ばす自然本来の姿なのだ。富春軒はそういう自然を特に好んで立花を立てている。自然本来の姿を立花に生かす醍醐味を後世に伝えるために。

夫れ花は目を悦たのしますの事ことのみに非あらざるなり。又、あに氣を養うの謂いいなからんや。なかんずく、

第一百七図

立花 水仙一色
水仙一色行 桑原次郎兵衛
水仙 小菊 著我



なかんずくⅡとりわけ

如かずⅡおよばない 恨むらくはⅡ残念なことには

梓に鏤めるⅡ版木に刻む

剗刷氏Ⅱ版木の彫り師

5年を要して立花時勢粧全八巻の内容を紹介してきた。八巻の最後には次の跋文がある。

貞享戊辰五月良日

洛陽後醫

西村氏義憤

立花時勢粧巻之八大尾

第百八図

二株砂物 水仙一色

水仙一色砂物 義憤（初版は桑原次郎兵衛）

水仙 小菊 路の臺 著我

へいか
瓶花の風雅たるや、遊賞なんぞこれに如かん。
ゆえ
故に世々これを伝えて、流派大いに漫れり。今
世洛下に富春軒仙溪という者あり。幼より今に
至るまで二十余年、花を嗜んで最も勉めたり。
この故に、諸流の奥儀を窮め、自然の花の妙を
探るなり。適、花をあつむるに当たつて、奇な
らずというもの無し。殆ど造化の手を仮るに似
たり。これに因つて、隣里郷党の影慕するもの、
その幾許と云ふことを知らず。予また、その門
に入りて、これを効うこと已に久し、唯恨むら
くは未だ測り易からざるものあることを。仙
やこの頃、編する所の書数巻、予をしてこれ
を見せしむ、その作たるや真画と妙解を与う。誠
に巻を出すして花法を知るものか。因て梓に鏤
めんことを請う。仙曰く、この書、人のために
するにあらず、ただ平日の戯翫のみと。予、強
いて剗刷氏に命ず。謂うに予も亦、彼の花蹊に
満つと云うものと何ぞ異らんや。ただ願わくば、
この書長く朽ちざらんことを、ここに於いて書
す。





伊勢菊

〈9頁の花〉 仙溪

花材 蔓梅擬 (錦木科)

雪柳 (薔薇科)

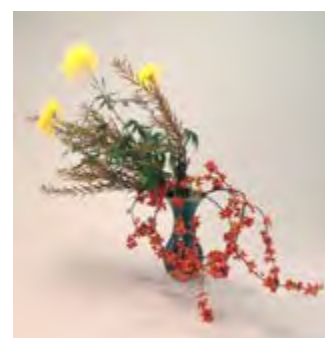
伊勢菊 (菊科)

花器 陶花瓶

イセギクは花卉が繊細なのに印象は強烈だ。一緒にいける相手もそこそこの強さがないと釣り合わない。

「瑞風」の美を訪ねて

J R 西日本が運行するトワイライトエクスプレス瑞風。京都駅の瑞風ラウンジでは、京都ゆかりの文化人によるミニトークでお見送りをしている。櫻子副家元もメンバーの一人で、瑞風ホームページでも写真と文章を見る事ができる。是非のぞいてみて下さい。



祇園祭にいけるいけばな展

7/15〜17 住友不動産フード

ホール7階 (四条河原町)

桑原仙溪

夏櫨 檜扇

桔梗 松明花





ホオズキをかためる

△10頁の花▽ 仙溪

花材 酸漿 (茄科)

カーネーション (撫子科)

花器 黒釉陶花器

ホオズキをかためてみた。ホオズキの軸を切り針金を刺したものを幾つも作っておき、束ねて棒にくくりつけている。白いカーネーションと対比させたいけげな。

朝の光の中で見ると、ホオズキの中に明かりが灯ったかのように優しく光っていた。



ローゼル

△11頁の花▽ 櫻子

花材 ローゼル (葵科)

リコリス・インカルナータ

(彼岸花科)

紫陽花 (紫陽花科)

花器 陶製スーパボウル

ローゼルの花はオクラやワタの花に似るが、蕾もしくは実の状態で



収穫し、肥大した萼と苞がジャムやハーブティーに利用される。生で食べると酸味があるそうだ。ローゼルは西アフリカ原産で熱帯地方に分布する。日が短くなると咲く短日植物である。

リコリス・インカルナータは狸の剃刀とも呼ばれる中国原産のリコリスの原種の一つ。岡山の先生が庭から切ってきて下さった。

このアンティークのスーパボウルに秋色のアジサイがよく映る。自分の感覚を頼りに三種の花を取り合わせたが、うまく調和してくれた。



台風15号と消費税

今月から消費税が10%に上がるが、消費税に限らず税の集め方と使われ方は、弱者に優しく若者に活力を与えるようなものであってほしい。また、千葉県など台風15号が残した爪痕に対して国の十分な支援がなされますように。政治に携わる人には私利私欲ではなく誠実さを第一に考えて頂きたい。

仙溪



七竈の生花

ななかまど

健一郎

花型 生花 草型 副流し
花材 七竈（薔薇科）
花器 陶花瓶

七竈のお生花を竹筒ではなく陶器に生けた。このお生花は私の東北での夏休みを体現したものだ。

7回、竈（かまど）に入れても燃えつきないということから付けられたという説が流布している。この夏ある陶芸家さんのお手伝いで宮城県の七ヶ宿に行ってきた。登り窯で焼くというのだから行かないわけにはいかない。身体による体験は宝である。体験するためには時間と費用を要するため無差別に体験をすることは難しいので、人と話したり、本から得た知識で自分にとって必要な体験に目星をつけそこに飛び込む。つまり身をもって知る事である。器をひとつ作るためにこんなに薪の量が必要なのか。3日間火を絶やさないとほこういう事か。1200度の竈に薪を放り込むとはこういう事か。火・土・水・空気。なんて純粹で、美しいんだろう。その中でも火には特別な何かを感じた。電気釜に薪を割って放り込むだけで陶芸の事を少しでも分かったと得意げだった自分が急に恥ずかしくなってきた。花を生けるときに器への意識が強まった。

私の言葉が拙い事は差し引いても伝えきれないほどの濃い体験をしてきた。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019 年
11 月号
No.677

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





かぼちゃのかたち

△2頁の花▽ 桜子

花材 木苺 (きいちご) (薔薇科)

花茄子 (はななす) (茄子科)

透し百合 (すかしゆり) (百合科)

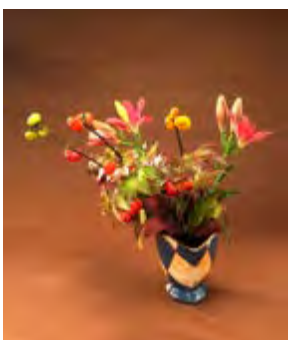
花器 陶花器

ナスやトウガラシの仲間、花ナスや花トウガラシとして、昔からいけばなの花材に使われてきた。

暑くて枝ものない時に代りとして使う事もあったが、葉がついていないので、中々きれいにさせるのは難しく、苦手な花材だ。

かぼちゃ型の平たいかたちの実が枝に並ぶ。観賞用のナス科の品種でソラナム・パンプキンと呼ばれる。ナスとトマトが混ざったような感じ。食べても美味しくないらしい。大学の講義でいけてみた(時々講師としてお呼びがかかる)。キイチゴの紅葉した葉を添えると瑞々しく、秋らしい花になる。面白いかたちが学生達にも喜ばれた。

横から見た奥行き





出逢い花 (35)

仙溪

しろやまぶき
白山吹 (薔薇科)

どうだんつつじ
満天星 (躑躅科)

花器 陶花瓶 (清水美菜子作)

どちらも枝一本ずつでいけている。ドウダンツツジは立派な枝の脇に出た小枝を切ってもらった。日頃から花屋と親しくしておく、こういう時に無理を聞いてもらえる。紅いドウダンツツジのとなりに鮮やかな黄色の葉が見えた。シロヤマブキの黄葉である。枝先に黒い実が光っている。これら二つを手にとってみる。すでに出逢い花ができていた。シロヤマブキはバラ科シロヤマブキ属の落葉低木。葉が対生するのでヤマブキ属のヤマブキと見分けがつく(ヤマブキは互生)。またヤマブキの実の実は暗褐色になり、ヤエヤマブキには実がならないと覚えておこう。

横から見た奥行き





妖怪礼賛

△4頁の花▽ 健一郎

花材

早蓮木 (沼水木科)

杜鵑草 (百合科)

スプレー菊 (菊科)

花器 手付籠

小学校四年生の頃にマンシヨン住まいの母の元を離れ、六角の家で暮らしている。昔ながらの日本家屋なため、マンシヨンでは感じ得ない何かを強く感じる。特に夜に強く感じる事が多い。その正体の一つに影というものがある。影は幼い頃の私によく畏怖の念を抱かせた。ただ怖いだけでは無く不気味だが興味を持たせられるアレである。

影は正確に間違ふことなくシルエットを切り取る。普段目に見えている物でも、影を見ると本当にその物なのかと見紛えたかと感じるほどに、刻一刻と多彩な表情をしている。光が当たっていないだけの世界の魅力は底が知れない。陽が沈んで電燈が消えると全く違った表情を見せる。昼間と同じ家だとはとても思えない。妖怪や幽鬼やを想像する事ができたのは神秘とも言えるべき闇と向き合っていたからであろう。明かりを灯した途端に妖怪は何処かへと消えてしまう。

京都に限らずだが、夜道を歩くと

多くの人が、自分の顔を照らしながら歩いている。高速で光が往来し、街灯が影を消している。これらによって引き起こされる、妖怪の住む世界の縮小は、これからの世代の人にとって、想像力の貧困に繋がってしまうかも知れない。まるで分からない事があってはならないかの様に光をあて影を取り除く行為は、次第にグレイゾーンをも無くしていく。幾ら考えても分からず、答えが出ない喜びはこれから時代を追うことに無くなっていく。○でも×でも無い△が正解かも知れないのに…。

自分の力を越えた物に感じる怯えと美が密接な関わりを持つ事を実感しつつある。そこに一縷の怯えがあることは確かだが、畏怖の念と美しいという感情には共通する所が多いのでは無いかと考えている。

同じ花を生けたとしても自分が花のことを分かったつもりで生けている作品は程度が知れている。そこに複雑性がなく、ミステリアスな空気感を纏っていないからだ。理解できてしまっではないけない。慢心せず、奢らずに少しでも歩み寄るのがいい。魅力的なグレイを引き出せる華道家がいてもいい。

烏瓜の実

〈表紙の花〉 仙溪

花材 雪柳（薔薇科）

梅（松科）

烏瓜（瓜科）

花器 陶花器（市川博二作）

今年もカラスウリの実をいただいた。青い葉がついた状態で蔓を束ね切り口に水を当てて一本ずつビニール袋に入れてある。庭の柿の木と楓にからみつくそうだが、蔓を切らないように解くのは大変だろう。

いただいたカラスウリはまず適当な木の枝を支えにして投入で楽しんで。半日は葉も瑞々しいが、翌日にはカリカリになっているので何か葉の繁った枝を加えたりしている。

写真は枯葉を取り去ったカラスウリの蔓をツガの枝にひっかけて実をぶら下げ、紅葉したユキヤナギだけを加えて、シンブルに赤い実を目立たせた。

古く唐から伝来した朱墨「唐朱」の原料鉱石が朱赤色で卵形のものもあり、それに似るので唐朱瓜。やがて烏瓜に。



肉◎キノコ×

健一郎

私は肉が好きでキノコが嫌い。特に好きな肉は牛肉で特に嫌いなキノコはシイタケ。祖父と倉敷国際ホテルで2人で食べた300グラムのステーキが1番のお気に入り。給食で昼休みの終わりで食べさせられかけたシイタケは大の二ガテ。私の特技のうちの1つに物事の合理化というものがある。自分に対して都合よく物事を捉える能力だ。

好きなものだけを食べ、嫌いなものは食べない。毎日食べる食事の時間を心の底から楽しむ。好きなものだけ食べて生きている。

食へのこだわりは祖父の影響も強いが、副家元の影響が大きい。数日に一度自分の好きな食材を買い溜め、毎日好きなものを作る。自分の好きな味をこさえられる事がすごいと素直に思う。あくなき食欲が彼女を動かしている。本人がよく言っているが飽きっぽいので、嫌でもおかずのレパートリーが増えるそうだ。日本、中国はもちろん、ハンガリー、フランス、ロシア、ベトナム、スペイン、ジョージアなど底が知れない。数あるレシピその中にも美味しい物と格別に美味しいものに分類される。格別に美味しい料理はレギュラー入りとなり、二ヶ月に一度ぐら

いのペースで頂ける。彼女の料理の凄さは豪華で派手な食事だと小さい頃に感じていた私だが、基本の料理のレベルが尋常ではないのだ。きんぴら、おからなどの一品料理が本当に美味しい。

好きなものだけを食べてきた私には、偏った持論がある。好きなものは一番好きな人が食べればいいというものだ。例えば、家族で困ったデューブルの大皿にお肉が一切れ余ったとする。その肉の事が一番好きな人が食べればいいという考え方だ。自分が一切れ余った肉を食べたいがための合理化なのは認めるが、実際に食べられる側からするとまだ一番マシなのかなとも思っている。

これでも食べ物への敬意、感謝はしようとはしている。嫌いなものを目を閉じて食べたり、鼻を摘んで食べるのは食べ物に対する失礼な態度だとはとらない。鼻を摘んで食べる行為がその後その食べ物の事が好きになるためのキツカ作りである事は理解しているが、自分が興味を持った上で持ちうる全ての感覚を使つて堪能する事が命として向き合う最低限の礼節ではないかと考えている。満たされきつた飽食の時代だからこそ一つ一つの命と丁寧に向き合っていきたい。

もう一つだけ向きあつて欲しい問

題がある。食べた物で体は形成されているという事実だ。何をあたり前のことを言い出したのかと驚ろかれる事があるのだが、実感できているかは別の話だ。私は個人的に自分の体が嫌いな物ではなく好きな物で出来ていて欲しいと願っている。かく言う私も実感は出来ていないと思うが、訳の分からないような物で自分が存在しているという事が怖くて、奇妙なものは出来る限り避けている。

テレビが何かで見た映像が衝撃的で頭から離れない。忙しそうな男性が移動時間を使ってレトルトのカレーをストローを使って食事をしているシーンだった。私の目には食事をしていくためのエネルギーをチャージしている生命活動の維持のための行為にしか見えず、とても食事を楽しんでいるようには見えなかった。ここ100年ほどで、人間が楽しむための娯楽が一気に増えた。食事ははじめとする基本的な欲求が蔑ろにされつつあるのではないかと感じている。人それぞれが求める形がいくら増えようと、基本的な欲求の質が高い生活を行える事に重きを置くだけで毎日の生活のクオリティが上がることは間違いない。

NHK WORLD JAPAN

CORE KYOTO

The Modern Flower

放映 10月10日 海外にて放送

※インターネットのオンデマンドでご覧いただけます。
(無料) QRコード↓



内容 京都の現代「花」事情

「華包」^{はなづつみ} 芦田一春 大津智永 他

「花遊び」桑原櫻子 桑原健一郎

「花結い」花結い師タカヤ

「いけこみ」花政 藤田修作 福山重文

※この内、桑原家の部分について紹介します。

桑原専慶流は300年以上の歴史があり、家元の家の各部屋には、普段から花がいけられている。花の世話は副家元の櫻子の役目だ。

櫻子「花は生き物なので、花がいけてないと寂しいんです。毎日水を換えて、少し足元を切り直して置いてあげると、又元気になって咲いてくれる。その元気を私達家族も貰いながら毎日生活してるわけで、花が無い時というのは、ほとんどこの家ではあり得ないです。」

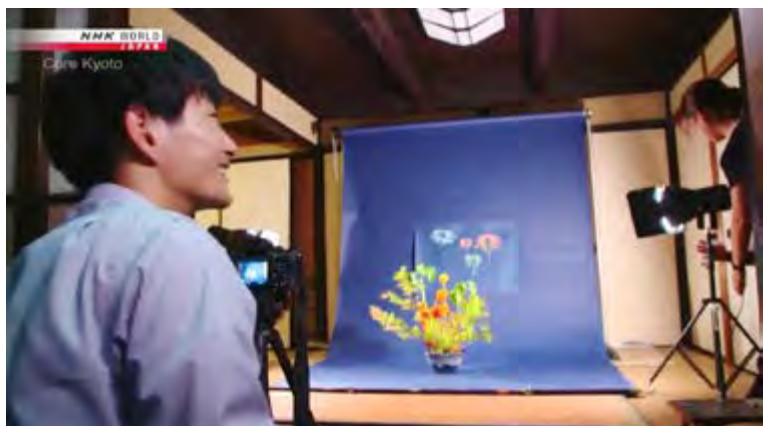
甥の健一郎は自分の世代で分かち合えるいけばなのスタイルを模索している。彼は生徒達にアートを楽しんでもほしいと願っている。

生徒さん「健一郎さんの教え方は、花を楽しむように語ってくださいます」

生徒さん「敷居の高さを感じさせないよう先生がお声がけて下さるのが、この教室の特徴と魅力だと思っています」

健一郎「伝統を守るだけでも凄く意味のあることだと思います。けれども僕はお花が好きで、どんどんやっていく内にそれだけではなく、自分のお花というものを探し始めているんです。」





若い未来のリーダーは教室に留まらず、ソーシャルメディアに作品を投稿している。

投稿作品の紹介

- ・多肉植物と地層と折り紙の恐竜たち
- ・桜の枝にとまる二羽の鳥のロマンス
- ・ガイコツとコウモリでハロウィンに

健一郎の新しい試みは伝統的ないけばなに、楽しい遊びの要素を加えること。

健「僕が3歳の頃から、祖母が出している本なんですけど、小さい写真集がございまして僕の原点でもあります。」

『ホッホチャンとケンチャン』の作品紹介

- ・子供用ブーツにバラ
- ・折り紙シュリケンとスイートピー
- ・てるてる坊主と柳とガーベラ
- ・ニッコリ手袋とアネモネと枝垂れ柳

祖母の素子さんが孫の健一郎と一緒におもちゃや人形を使った「花遊び」を写真に撮り、

祖父が文章を添えて本を出版。

『ホッホチャンとケンチャン』は彼が花に親しむきっかけとなった。

祖母に触発された彼は今、いけばなの喜びを広めようと懸命だ。

新しい作品を撮影する健一郎。

- ・切り絵の花火にホオズキと楓
- ・真夏の花火の思い出にいけばなを重ねる。

作品の前に、櫻子副家元と話す健一郎。若い華道家は時折受けるきびしい批評を糧

NHK WORLD JAPAN
Core Kyoto
"The Modern Flower"

Produced by NHK 2019
in association with
NHK PLANNET and in
cooperation with
J WORKS

にして、新たな挑戦が続けている。

立花時勢粧の器

「立花時勢粧」には118の図が収められているが、その器は96種類もある。出版された元禄元年頃には、華やかな世相と立花の流行とが相まって、立花瓶にも様々な形や新しい意匠をこらしたものが作られた。

自由奔放な自然の息吹とその調和を表現しようとした富春軒仙溪。特に行や草の立花には、それに呼応するような変化に富んだ器を選んで使っている。

器の形だけを見ても様々な形態のものがあるが、立花瓶の遊びの部分として「耳」に注目してみよう。

図① 蛸螂

図② 魚

図③ 象

図④ 鳥

図⑤ 兎

図⑥ 蝶

これらの意匠に釣り合う躍動感が花形にも求められることになるが、どんな花かは、それぞれの図で確かめていただきたい。



第六十六図 テキスト No.655



第七図 テキスト No.613・648 (に掲載)



第七十図 テキスト No.674



第二十五図 テキスト No.647



第八十七図 テキスト No.654



第五十七図 テキスト No.673

第52回 日本いけばな芸術展

会期 10月1日(火)～8日(火)

会場 東京日本橋高島屋

出品

4次展10月7日(月)～8日(火)

桑原仙溪 佐藤慶由

除真立花

花材

松(松科)

山帰来(猿捕次科)

蓮華躑躅(躑躅科)

満天星(躑躅科)

柊(柊科)

貝塚伊吹(檜科)

寿松(松科)

鶏頭(苧科)

小菊(菊科)

花器

銅立花瓶

盛花

花材

梅擬(繡の木科)

満天星(躑躅科)

糸菊(菊科)

杜鵑草(百合科)

羊歯(羊歯類)

花器

古染付水盤





山芍薬の実

△10頁の花▽ 櫻子

花材 山芍薬 (牡丹科)

糸菊 (菊科)

蓼 (蓼科)

花器 手付通草籠

ヤマシヤクヤクの学名は「ピオニア・ジャポニカ」でボタン科のボタン属。初夏の頃、透き通るような繊細な花を一輪だけ咲かせる。洋芍薬とは違い中々出会う事の出来ない貴重な花だ。器も取り合わせも特別なものを考えてあげないと綺麗に咲いてくれないような気がする。場所によつては絶滅危惧種にもなつていて、咲くのに6年もかかるので、育てている方は大変な事だ。その清楚な花からは想像も出来ないような派手な実。初秋には実が熟して結実しない赤色と結実した濃紺色の種子になる。

今年は入荷する数も少なく大切な一本となった。一輪菊とタデの花と籠花に。





雪柳と水仙

△11頁の花▽ 仙溪

花形 生花 株分け

花材 主株 雪柳（薔薇科）

子株 水仙（彼岸花科）

花器 陶水盤

秋の菊と冬の水仙。どちらも、多くの植物が葉を落とし、地上から姿をいったん消してしまふ淋しい時期に花を咲かせてくれる。菊の季節、水仙の季節を心待ちにして、今年も楽しませてもらえることに感謝したい。

水仙の生花は一種でいけて凛とした姿にするも良し、他の花や木と株分けにしてもいい。水仙は11月から2月初旬までいけられるので、取り合わせも色々楽しめる。雪柳の紅葉との対比が美しい。

レモンだより

お床を拝見中。

花…酸漿 アナベル 檜扇の実

額…版画 リンゴと少女（柳本史 ふうみ）





鎌柄の生花

△12頁の花▽ 健一郎

花材 鎌柄（薔薇科）

花器 煤竹竹筒

鎌柄は非常に堅く、鎌の柄に使われたことからカマツカと名付けられた。別名のウシゴロシは、この材で牛の鼻木を作ったためとする説などがある。生け花で用いるときは実と葉のバランスをとるのを気をつけると良い。どうしても実のつき方によつては、間の抜けた作品に仕上がってしまう反面、伸び伸びとした花に仕上げると独特の生花になった。熟した赤い実。まだ黄葉する前の葉。日照時間が短くなってきたなと実感する一つの要因でもある。紅葉の姿を見て、一緒に耐え抜いた暑さを懐かしむ。そして自分がクーラーのついた部屋に居たことをイカサマ呼ばわりされる。「あなたは夏を経てまっくろに日焼けしていないのね」と。これから始まる厳しい冬に備えてストーブの用意はもうしてある。

横から見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019 年
12 月号
No.678

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





月桃の実のいけばなとお茶

△表紙の花▽ 櫻子

花材 月桃の実（生薑科）

薔薇（薔薇科）

花器 デルフト花瓶

沖縄から来た月桃の実。夏には可愛らしいキャンディの様な実になるので、稽古花材として良く使う様になった。緑、黄、オレンジ、赤と色づいて最後は薄茶色の実となる。沖縄ではとても身近なショウガ科の植物で生活の一部として使われる。葉は抗菌効果があるので食物を包んだり、乾燥させて虫除けにも。花は桃の実のように可憐だが中々いける事は出来ない。その花の蒸留水は化粧水にもなる。

寒い日の夜、月桃のハーブティは身体を温めてくれる。ワインよりもポリフェノールが多くノンカフェイン。乾燥した実を5分ほど煮出して、ピリッとしたエキゾチックなお茶。



南天とピンポン菊

△2頁の花▽ 仙溪

花材 南天（目木科）

ピンポン菊（菊科）

花器 方形陶花瓶（宮下善爾作）

木枯らしに身を震わせる頃、南天の赤い実を見ると、なんとなく勇気づけられる。寒さもへっちゃらな濃緑の葉をぎりつと広げた姿は粋である。白とピンクの手鞠のような菊を取り合わせると、新鮮な感覚のいけばなになった。

バラの実「センセーショナル・ファンタジー」

△3頁の花▽ 櫻子

花材 メラレウカ（フトモモ科）

薔薇の実（薔薇科）

ダリア（菊科）

花器 ガラス花瓶（フィンランド）

バラの実「センセーショナルファンタジー」は一重の濃いピンクの花が咲いた後の実を鑑賞するためにつくられた品種だそう。樹勢が強いので栽培しやすく、今後出荷も増えてくるだろう。長く飾ったあとドライにしてさらに楽しむ。

実の足元に黄色のメラレウカをたっぷり加え、同色のダリアを覗かせた。赤い器にいけると実たちが元気に飛び跳ねて見える。喜んでくれているようだ。



山茶花の生花

△ 4 頁の花 V 健一郎

花型 生花 行型
 花材 山茶花 (椿科)
 花器 煤竹竹筒

中庭に植わっている山茶花とはもう長い付き合いだ。今年も少し遅かったが咲いてくれている。小学4年生の頃から家元宅に住まわしてもらっているが、年々目の合う回数が増えてきた。一度意識してしまうと何度も見てしまう。

幼い頃は、祖父が入った後の熱すぎる湯に浸かり火照った身体を冷ますうと蔵の前に腰をかけ、明るすぎる夜空と中庭を見て過していた。湯冷めし風邪をひくこともあったが本当に好きな時間だった。熱すぎるお湯につかる事が身体にとって良くないことも知り、湯冷めをしたら風邪をひくことも学習したが、気がつくとな好きな時間が無くなっていた。今は日の出ている時間みる葉の陰りがとても綺麗に思える。

横から見た奥行き



平安神宮献花祭

老爺柿の投入

花材 老爺柿（柿の木科）

臙脂色ピンポン菊（菊科）
薄紅色糸菊（菊科）

花器 黄色糸菊（菊科）
柿色陶壺

ロウヤガキは中国原産の渋柿の一種で、実が黒く熟すのを鴉になぞらえて老爺柿と呼ばれ、やがて老爺柿に。ツクバネガキとも呼ぶ。

老爺柿の生花

花材 老爺柿（柿の木科）

山茶花（椿科）
花器 銅花瓶

ロウヤガキの切り枝は高価だが小さな実が愛らしく、実がたわわに生った大きな柿の木を遠目に眺めているような風情がある。ロウヤガキには先が鋭く尖った小枝があるので怪我をしないように注意。



立花時勢粧の器 ②

「立花時勢粧」の立花図に描かれている立花瓶・砂鉢は96種類ある。前号につづき「耳」に注目してみよう。

図① 象

一番最初の「真の花形」の器。第七十九図・第八十図の「真の対の花」にも使われている（テキスト615）。

図② 象

この象は鼻の形が特徴的。「立花時勢粧」には象の意匠の

器が6種類ある。

図③ 龍

この図は富春軒による「除真の内草の花形」である。他にも第九十九図・第一百十図の松一色の立花（どちらも富春軒作）に使われている（テキスト636）。富春軒

にとって特別な器の一つといえる。

図④ 龍

図⑤ 獅子

第八十四図（テキスト615）と共に「草の対の花」に對で使われている。

図⑥ 唐子

図⑦ 巻葉（蓮？）

図⑧ 竹

図⑨ 竹

図⑩ 竹

⑧⑨⑩図はどれも真が松の立花だが、それぞれに個性的な松なので見比べると面白い。



第一図 テキスト No.612・633に掲載



第六十図 テキスト No.661



第二十四図 テキスト No.640



第五十九図 テキスト No.674



第二十一図 テキスト No.625



第八図 テキスト No.613



第五十八図 テキスト No.669



第十二図 テキスト No.622



第八十三図 テキスト No.615・637



第四十一図 テキスト No.641

卒業旅行 パリ・ベネチア

健一郎

ベネチア(英語ではベニス)での3日目の朝、ドラキュラのメイクをした中学生ぐらいの1人の男の子とすれ違った。アカデミア橋の上でマントをたなびかせ登校している。ああ、今日はハロウィーンか。特に何をするわけでも無く予定通りの時間を過ごす。目的地に着くまでに大勢の学生とすれ違うが、仮装をしているのは彼だけだった。どうも彼は強い心臓を持っているみたいだ。

確か去年のハロウィーンは私の一つ年下の弟の順之助が高校にキヤラクターものの着ぐるみをきてバイクで学校に行っていた。渋谷は仮装人たちが溢れかえっているそうだが単身で仮装をしている成人男性は京都ではみかけない。気が盛り上がって後悔していなければいいのだが。あの後学校でどうなったのか聞くのを忘れていた。

昔からなのだが、私の弟は少し変わっている。みんなが右を向いているときに必死に左を注視しているようなやつだった。端的にいえば変わり者である。本人はその他大勢と同じく右を向きたいらしく日々必死に努力をしている。左を向くようそののかしてみても効果はなかった。順之助が小学生のころ発表会に出すた

めに描いた、星月夜に羽ばたくコウモリの絵は私のお気に入りである。

実際に発表会に足を運んだ母によると、小学生らしいたくさん色を使い、キラキラした絵を描く中に明らかに一つだけ暗い絵がありそれが息子の絵でショックだったと言っていた。彼は決して先生に描かされて絵を描いた事は無かった。周りを見て合わせようとするところはならないはずだ。周りが見えなくなるほどに一つの事だけに集中すると今までその人が経験した感覚が研ぎ澄まされ、その個人の特徴を持つようになる。今でもたまに鉛筆で描いているのを見かけるが周囲の顔色を伺うことを覚えた順之助は大衆漫画の模写ばかりである。

芸術家は大衆の模倣をした途端に埋没してしまう。オリジナリティーの有無を論じたいのでは無い。ただ、いつの世であっても世界を変えてきたのは少数派である事実は明白である。

ベネチアへいく前にパリに寄った。パリにて古典〜近代までの美術を見て周り、ベネチアにて現代の美術を体感すべくこの二都市に絞った。無理をしてこの歳で1人で行っているのは、何度も行き同じ作品と向き合ったときの自分の進捗状況の確認のためでもあるが、抑えきれない好奇心が強く起因している。興味

を持つと止まってはられない。

感性を磨くために美しいものに囲まれ、美の感覚を研ぐ作業をするために日常が日常でなくなる。自分の見る全ての世界を変えるには、自分が変わりさえすればどんなものにもなる。

随分な数の作品を見たが、私的には、賛嘆を強要するような崇高な作品ではなくただ純粹に美しい作品に強く惹かれた。純粹な美しさは私を観想に誘う。

自分と作品を分け隔てる結果がないため、作品の息づかいが聞こえる

ようだった。生き生きとした筆の

タッチ、堂々とした趣、何を一つをとってもそれは非常に人を惹きつける強力な引力を持つのだがその根幹の節々に愛情が感じられた。その愛情は周りまわって憎悪にもなりうるのだが、裸で作品と向き合っているかのような感覚だった。あれほどの作品は偏愛の中からしか生まれえないだろう。決して周囲の顔色を伺ってできる代物ではなかった。

ベネチアビエンナーレの作品をみて回って帰路につく。百人百様に解釈された作品を消化しきれずにいたが、お腹は空く。適当な店でスパゲッ

ティでも食べようと店を覗くと、小さいお化け達が占拠してよく周りをみると、この辺り一帯のお店でまともに食事ができそうにない。実際に見たのは初めてだったかも知れない。魔女やカボチャに扮した子供達が店という店を一軒一軒丁寧にツアゲするのを目の当たりにするのは、子供が群れて店を襲う姿はなんとも愛らしい。大人数の群れで行動する子供達がキラキラ輝くほどに朝

にすれ違ったドラキュラの男の子が色濃く想起される。彼は無事大恥をかいていれば嬉しく思う。



ホテルの近くの運河にて

海運国家として名を馳せたベネチア。複雑な蜘蛛の巣のように張り巡らされた生活の生命線とでも言うべき運河を背景に、ベネチアの特産として有名なムラノガラスにデンファレを生けた。パリのオランジュリー美術館でクロード・モネが取り組んだモチーフを自分なりに咀嚼し表現したものである。



夏櫨の立花

△ 9 頁の花▽ 健一郎

花型 除真立花

花材 夏櫨(躑躅科)

七竈(薔薇科)

栗(櫟科)

雪柳(薔薇科)

桔梗(桔梗科)

小菊(菊科)

花器 陶花器

今年のはかき氷は美味しくなかった。きつと冷夏のせいだと思う。あまりの寝苦しさは夜中に目を覚ますこともなく、過ぎしやすい夏が終わった。もう秋である。短い短い秋の到来は年末にむけてドタバタとしていると途端に終わってしまうが、その短い時間で自然も冬に向けての準備で刻一刻と様子を変えるため、毎日の観察が楽しい。

この立花は普段のお稽古のものに比べると大ぶりの立花である。あまりにもしっかりとした夏櫨だったので落とす葉も最低限に抑えた。この荒ぶる夏櫨を七竈が濃い紅葉で請けている。そしてこの役目を終えた葉は散っていく。今年は長い期間、青い葉が手に入る環境だったため例年とは違った違和感を覚える。同じ毎年ではなく毎年少しずつ違う。慣れれば慣れるほどその違いは分からなくなるのかも知れないが、毎回をその時を新鮮に味わう事は大切である。



ツルウメモドキ

仙溪

1985年8月下旬、「新進いけばな作家競作展」に辻田慶敬さんが出品したツルウメモドキの生花は今でも忘れられない。若い実と瑞々しい葉が茂り、3日間来場者を魅了していた。白リンドウを根締めにし、ピンクのデンファレとの二瓶飾りで、ツルウメモドキの葉色が際立っていた。



テキスト265号より

除真立花

〈10頁の花〉 仙溪

花型

除真立花

花材

躑躅(躑躅科)

蔓梅擬(錦木科)

雪柳(薔薇科)

貝塚伊吹(檜科)

二輪菊(菊科)

小菊など5種(菊科)

花器

広口陶花器



稽古で立てた立花を十日後に撮影した。緑色だったツルウメモドキの実が弾け、二輪菊が大きく咲いてきた。請と控枝は紅葉したキイチゴだったがユキヤナギに代え、胴の糸菊も小輪種にさしかえた。あれこれ工夫しながら長く楽しんでいる。



蔓梅擬の生花

△11頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 副流し
花材 蔓梅擬(錦木科)

小菊(菊科)
花器 煤竹竹筒

柔らかい蔓は途中まで互いにかめたり、別の枝を支えにしたり、ぐるぐる巻き付いたりしている。





啓翁桜の生花

〱12頁の花〰 仙溪

花型 生花 草型 副流し

花材 啓翁桜（薔薇科）

花器 煤竹竹筒

桜は充分に寒さを感じてからでないと開花しない。冬が来るのが早い東北では、12月にお正月用のケイオウザクラが出荷される。

新春に一足早い春を楽しもうと、ケイオウザクラを生花にかけた。部屋の温もりで蕾がふくらんでゆくと、心も温かくなる。



レモンだより

ひなたぼっこ中。

